

TIBCO FOCUS®

Db2 Web Query for i 管理ガイド

バージョン 2.3.0

February 2022



目次

1. Db2 Web Query 管理コンソール	5
Db2 Web Query 管理コンソールへのアクセス	5
Db2 Web Query の構成	6
アプリケーションの設定	6
Web Query での Web Query Client 設定の変更	20
カスタム設定の理解	21
言語の切り替えのカスタマイズ	21
出力先変更設定の理解	22
InfoAssist のプロパティ	24
グローバル設定でのキャッシュの有効化	33
HTML5 グラフ拡張機能の操作	40
HTML5 グラフ拡張機能エントリの理解	41
HTML5 グラフ拡張機能の有効にする/有効化済みチェックボックスの理解	41
拡張機能のアップロードとインストールページを使用した追加の HTML5 グラフのアップロード	42
2. Db2 Web Query 変更管理	49
変更管理プロセスの理解	49
アプリケーションファイルの移動 - 単純な変更管理プロセス	50
アプリケーションファイルの移動 - 包括的な変更管理プロセス	50
変更管理パッケージの作成	51
Legal and Third-Party Notices	63

目次

1

Db2 Web Query 管理コンソール

Db2 Web Query 管理コンソールを使用すると、Db2 Web Query 環境をリモート管理することができます。管理者は、このコンソールから Db2 Web Query Client のさまざまな構成設定にアクセスして設定を変更することができます。

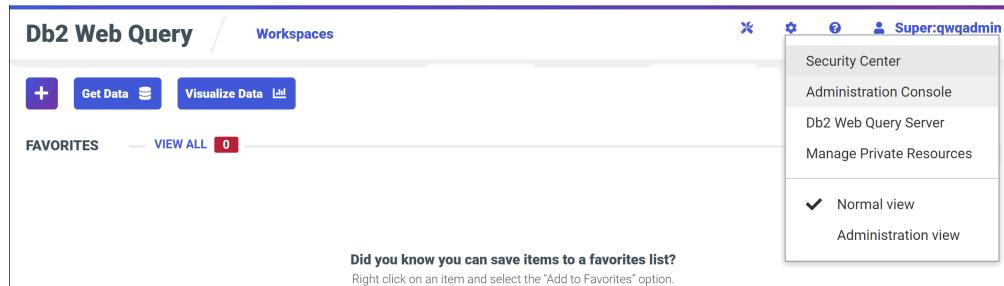
トピックス

- [Db2 Web Query 管理コンソールへのアクセス](#)
- [Db2 Web Query の構成](#)
- [Web Query での Web Query Client 設定の変更](#)
- [HTML5 グラフ拡張機能の操作](#)

Db2 Web Query 管理コンソールへのアクセス

管理コンソールにアクセスするには、下図のように、ホームページの右上から設定アイコン

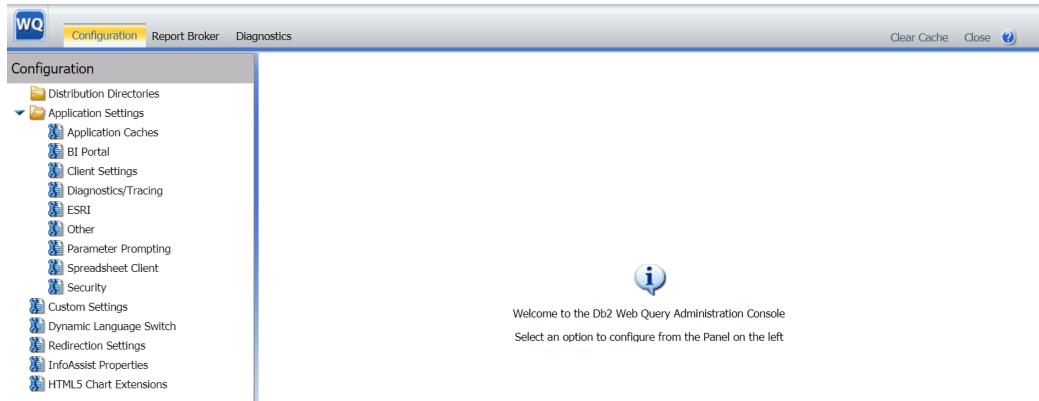
- ⚙️ を選択し、コンテキストメニューから [管理コンソール] を選択します。



Db2 Web Query 管理コンソールが開きます。

Db2 Web Query の構成

Db2 Web Query 管理コンソールを使用して Db2 Web Query Client の構成設定を更新するには、下図のように、[構成] タブをクリックし、画面左側のメニューのカテゴリからいずれかをクリックします。



画面上部で次のオプションをクリックすることもできます。

キャッシュのクリア メモリキャッシュ内の情報をクリアします。メモリキャッシュには、Db2 Web Query Servlet のリクエストごとに処理される情報が格納されています。この情報として、Db2 Web Query のスクリプトファイルおよび構成ファイル、デフォルトの Managed Reporting ドライバのキャッシュなどがあります。

キャッシュをクリアすると、ユーザの Report Broker スケジュール権限が完全に失われます。この操作は、`folder-sched` グループからユーザが移動または削除された場合に実行する必要があります。

閉じる 管理コンソールを閉じます。この時点では、管理者として Db2 Web Query にログインした状態が保持されています。

ヘルプ オンラインヘルプを表示します。

アプリケーションの設定

[アプリケーションの設定] では、Db2 Web Query Web アプリケーションの構成および動作を設定します。

手順

アプリケーション設定を表示または編集するには

1. 管理コンソールの [構成] タブで [アプリケーションの設定] フォルダを展開し、表示または編集する設定のカテゴリを選択します。

右側の構成ウィンドウに各種設定が表示されます。

2. 変更後、[保存] をクリックします。

参照

アプリケーションキャッシュの設定

[アプリケーションキャッシュ] ページの設定では、Application Server のデータ値キャッシュのサイズおよびコンテンツを構成します。これらのキャッシュは、オートプロンプトレポート、埋め込み BI アプリケーションで使用するパラメータ、または FIND パラメータ構文を含むプロシージャに割り当てられます。FIND パラメータ構文は、使用可能な検索パラメータ値の範囲を制限するために使用されます。

これらの設定では、ユーザ環境のデータ値キャッシュ操作のデフォルト構成を定義します。管理者およびセッションビューアの使用権限を所有するユーザは、[キャッシュ] リストのオプションを使用してこれらのデフォルト設定を一時的に上書きすることができます。

[アプリケーションキャッシュ] ページには、[レポート出力キャッシュ] の設定も含まれます。この設定では、レポート出力に別のキャッシュの使用を定義します。

データ値最大キャッシュメモリ (MB)

データ値キャッシュに割り当てる最大メモリを定義します。このキャッシュには、プロシージャで発行されたクエリからサーバが取得したデータソース値が保持されます。プロシージャは、FIND パラメータ構文の 2 部構成名でマスターファイルのソースを識別します。これらの値は通常、オートプロンプトレポート、埋め込み BI アプリケーションで使用するパラメータ、または FIND パラメータ構文を含むプロシージャに割り当てられます。FIND パラメータ構文は、使用可能な検索パラメータ値の範囲を制限するために使用されます。また、マスターファイルへの IBFS パスおよびプロシージャを実行したユーザ ID もこのキャッシュに含まれます。データ値キャッシュは、Web Query Application Server をホストするマシンのメモリを使用します。

この設定にはデフォルト値 0 (ゼロ) が割り当てられます。これは、データ値キャッシュに割り当てるメモリがないこと、およびデータ値がキャッシュされていないことを示します。

データ値キャッシュの使用を有効にするには、管理者はこの設定に 1 から 500 までの数値を割り当てる必要があります。ほとんどの場合、組織のキャッシュ要件には 10 メガバイトで対応できます。

データ値ユーザキャッシュパス

データを取得したユーザのみデータソース値の使用が可能なリソースへの IBFS パスを指定します。

この設定で定義するパスには、DBA または行レベルセキュリティの制限が適用されているデータを含むリソースのみを指定します。これらの制限が適用されないキャッシュリソースの呼び出しについては、Web Query では [データ値グローバルキャッシュパス] 設定で定義されたパスが使用されます。

この設定で IBFS パスが定義されていない場合、データソース値はキャッシュされません。これがデフォルト値です。

この設定で 1 つまたは複数の IBFS パスが定義されている場合、これらのパスで定義されたすべてのリソースから取得されたデータ値が、各ユーザのデータ値ユーザキャッシュに含まれます。この設定に複数のパスを含める必要がある場合は、ブランクを使用せずセミコロン (;) で区切れます (例、/EDA/EDASERVE/retail_samples;/EDA/EDASERVE/ibisamp)。

この設定で定義するパスには、IBFS パスフォーマットを使用します。このフォーマットには、少なくとも IBFS サブシステムコンポーネント (/EDA) とサーバノード名をこの順序で含める必要があります。比較的短い、上位のパスを使用した場合、幅広いフォルダおよびフォルダ内のマスターファイルが定義されます。下位レベルに及ぶ比較的長いパスを使用した場合、より狭い範囲のアプリケーションフォルダおよびマスターファイルが定義されます。パスは、個別のアプリケーションフォルダレベルまたは単一のマスターファイルレベルまで指定することができます。

この設定で複数のフォルダまたはマスターファイルを指定するには、幅広いフォルダを含む比較的短い、上位レベルのパスを使用することも、フォルダおよびマスターファイルの非常に特定されたグループを指定する一連のより長く、詳細なパスを指定することもできます。この設定に複数のパスを含める必要がある場合は、ブランクを使用せずセミコロン (;) で区切れます (例、/EDA/EDASERVE/retail_samples;/EDA/EDASERVE/ibisamp)。

この設定の IBFS パスには、次の構造を使用します。パスの先頭の 2 つのコンポーネントのみが必須です。残りのパスコンポーネントは、絞り込むパスの範囲に応じていくつでも追加することができます。

`/EDA/Node/ApplicationFolder/SubFolder1 ... SubFolderN/Resource`

説明

EDA

EDA IBFS サブシステムです。このコンポーネントはすべてのパスで必須です。このコンポーネントには、先頭にスラッシュ (/) が必要です。

Node

ノードの名前です。このコンポーネントはすべてのパスで必須です。

ApplicationFolder

データをデータ値キャッシュに追加するリソースが格納されたアプリケーションフォルダの名前です。

SubFolder1 ... SubFolderN

アプリケーションフォルダ下のパスのフォルダ名です。パスのエンドポイントに接続します。必要な数のフォルダを追加します。

Resource

パスのエンドポイントです。これが、1つまたは複数のマスターファイルを格納するフォルダ名の場合、このフォルダのすべてのマスターファイルのデータがキャッシュに含まれます。ここで指定するマスターファイルの名前に拡張子.mas が付かない場合、この特定のマスターファイルのデータのみがキャッシュに含まれます。

注意：[データ値ユーザキャッシュパス] 設定で定義したフォルダまたはマスターファイルへのパスは、[データ値グローバルキャッシュパス] 設定で定義したパスに優先します。つまり、[データ値グローバルキャッシュパス] 設定と [データ値ユーザキャッシュパス] 設定で同一のパスが表示される場合は、このパスのマスターファイルから取得されたデータは、グローバルキャッシュではなくユーザセッションキャッシュに移動されます。

データ値グローバルユーザキャッシュパス

データソース値が、データ値グローバルキャッシュで制限なくすべてのユーザに使用可能になりソースへの IBFS パスを定義します。

この設定で定義するパスには、DBA または行レベルセキュリティの制限が適用されないデータを含むリソースのみを指定します。これらの制限が適用されるキャッシュリソースの呼び出しについては、Web Query では [データ値ユーザキャッシュパス] 設定で定義されたパスが使用されます。

この設定で IBFS パスが定義されていない場合、データソース値はデータ値グローバルキャッシュに含まれません。これがデフォルト値です。

この設定で 1つまたは複数の IBFS パスが定義されている場合、これらのパスで定義されたリソースから取得されたデータ値が、データ値グローバルキャッシュに含まれます。

この設定で定義するパスには、IBFS パスフォーマットを使用します。このフォーマットには、少なくとも IBFS サブシステムコンポーネント (/EDA) と ノード名をこの順序で含める必要があります。比較的短い、上位のパスを使用した場合、幅広いフォルダおよびフォルダ内のマスターファイルが定義されます。下位レベルに及ぶ比較的長いパスを使用した場合、より狭い範囲のアプリケーションフォルダおよびマスターファイルが定義されます。パスは、個別のアプリケーションフォルダレベルまたは単一のマスターファイルレベルまで指定することができます。

この設定で複数のフォルダまたはマスターファイルを指定するには、幅広いフォルダを含む比較的短い、上位レベルのパスを使用することも、フォルダおよびマスターファイルの非常に特定されたグループを指定する一連のより長く、詳細なパスを指定することもできます。この設定に複数のパスを含める必要がある場合は、ブランクを使用せずセミコロン(;)で区切れます(例、/EDA/EDASERVE/retail_samples;/EDA/EDASERVE/ibisamp)。

この設定の IBFS パスには、次の構造を使用します。パスの先頭の 2 つのコンポーネントのみが必須です。残りのパスコンポーネントは、絞り込むパスの範囲に応じていくつでも追加することができます。

`/EDA/Node/ApplicationFolder/SubFolder1 ... SubFolderN/Resource`

説明

EDA

EDA IBFS サブシステムです。このコンポーネントはすべてのパスで必須です。このコンポーネントには、先頭にスラッシュ (/) が必要です。

Node

ノードの名前です。このコンポーネントはすべてのパスで必須です。

ApplicationFolder

データをデータ値キャッシュに追加するリソースが格納されたアプリケーションフォルダの名前です。

SubFolder1 ... SubFolderN

アプリケーションフォルダ下のパスのフォルダ名です。パスのエンドポイントに接続します。必要な数のフォルダを追加します。

Resource

パスのエンドポイントです。これが、1 つまたは複数のマスターファイルを格納するフォルダ名の場合、このフォルダのすべてのマスターファイルのデータがキャッシュに含まれます。ここで指定するマスターファイルの名前に拡張子.mas が付かない場合、この特定のマスターファイルのデータのみがキャッシュに含まれます。

データ値除外キャッシュパス

[データ値グローバルキャッシュパス] 設定または [データ値ユーザキャッシュパス] 設定で定義されたパスのうち、データ値をこれらのキャッシュから除外する必要のあるフォルダまたはマスターファイルへの IBFS パスを指定します。

この設定で IBFS パスが定義されていない場合、[データ値グローバルキャッシュパス] 設定または [データ値ユーザキャッシュパス] 設定のパスで定義された各リソースまたはフォルダからデータ値が除外されません。これがデフォルト値です。

この設定で 1 つまたは複数の IBFS パスが定義されている場合、これらのパスで定義された各リソースまたはフォルダのデータ値が、グローバルデータ値キャッシュおよび各ユーザのセッションキャッシュから除外されます。この場合、データ値は、格納するフォルダまたはディレクトリがキャッシュの対象であっても除外されます。

この設定で定義するパスには、IBFS パスフォーマットを使用します。このフォーマットには、少なくとも IBFS サブシステムコンポーネント (/EDA) とサーバノード名をこの順序で含める必要があります。比較的短い、上位のパスを使用した場合、幅広いフォルダおよびフォルダ内のマスターファイルが定義されます。下位レベルに及ぶ比較的長いパスを使用した場合、より狭い範囲のアプリケーションフォルダおよびマスターファイルが定義されます。パスは、個別のアプリケーションフォルダレベルまたは単一のマスターファイルレベルまで指定することができます。通常、この設定では、他のデータキャッシュ設定で定義されたパスから除外する個別のフォルダまたはマスターファイルを特定するため、比較的長い、より詳細なパスが必要です。

この設定に複数のパスを含める必要がある場合は、ブランクを使用せずセミコロン (;) で区切ります(例、/EDA/EDASERVE/retail_samples;/EDA/EDASERVE/ibisamp)。

この設定の IBFS パスには、次の構造を使用します。パスの先頭の 2 つのコンポーネントのみが必須です。残りのコンポーネントを使用して、パスを絞り込むことができます。

`/EDA/Node/ApplicationFolder/SubFolder1 ... SubFolderN/ResourceFolder/Resource`

説明

EDA

EDA IBFS サブシステムです。このコンポーネントはすべてのパスで必須です。このコンポーネントには、先頭にスラッシュ (/) が必要です。

Node

ノードの名前です。このコンポーネントはすべてのパスで必須です。

ApplicationFolder

データをデータ値キャッシュから除外するリソースを格納するアプリケーションフォルダの名前です。

SubFolder1 ... SubFolderN

アプリケーションフォルダ下のフォルダの名前です。パスのエンドポイントに接続します。必要な数のフォルダを追加します。

Resource

パスのエンドポイントです。これが、1つまたは複数のマスターファイルを格納するフォルダ名の場合、このフォルダのすべてのマスターファイルのデータがキャッシュから除外されます。ここで指定するマスターファイルの名前に拡張子.mas が付かない場合、この特定のマスターファイルのデータのみがキャッシュから除外されます。

レポート出力キャッシュ

レポート出力をキャッシュするかどうかを指定します。次の値が使用できます。

- オフ** レポート出力はキャッシュされません。これがデフォルト値です。
- オン** レポート出力がキャッシュされます。また、レガシーホームページの [プロパティ] ダイアログボックスに [レポート出力キャッシュのルール名] テキストボックスが表示されます。
- HIDDEN** レポート出力がキャッシュされます。ただし、レガシーホームページの [プロパティ] ダイアログボックスに [レポート出力キャッシュのルール名] テキストボックスは表示されません。

レポート出力は、レポートまたはグラフのプロジェクトに対してから取得される情報で、データ値、列タイトル、フォーマット設定が含まれます。

注意：[レポート出力キャッシュのルール名] テキストボックスには、レポート出力のキャッシュ方法を制御するルールを指定する文字列が表示されます。これらのルールは、キャッシュがすべてのユーザに適用されるか、データをリクエストしたユーザにのみ適用されるか、ユーザが割り当てられたグループのメンバーで共有されるかどうかを決定します。

参照

BI Portal の設定

[BI Portal] 設定では、ポータルの表示および動作を構成します。

ログインメッセージ

ユーザがログインした際に [メッセージ] ダイアログボックスに表示されるカスタムメッセージを指定します。このテキストボックスには、テキストのみを入力することも、テキスト、リンク、イメージの HTML タグを入力することもできます。このテキストボックスをブランクにすると、[メッセージ] ダイアログボックスは表示されません。

ログインメッセージに使用可能な HTML タグには、次のものがあります。

、
、、<u>、、、

ログインページのリンク

Db2 Web Query のログインページにリンクを表示するか非表示にするかを設定します。

このチェックをオン (True) にすると、Db2 Web Query ログインページに追加のテキストおよび情報またはサポートサイトへのリンクが表示されます。この設定がデフォルト値です。

このチェックをオフ (False) にすると、Db2 Web Query ログインページに追加のリンクのサポートテキストは表示されず、画面のタイトル、ユーザ名、パスワード、[ログイン] ボタンのみが表示されます。

セッションタイムアウト

ユーザがアイドル状態を保持できる期間のセッションタイムアウト値を制御します。この制限時間を超えると、セッションタイムアウトになります。この設定値は分単位で定義します(例、IBI_Session_Timeout=120)。

参照

Client 設定

[Client 設定] では、さまざまな Client オプションを構成します。

最大レスポンスウィンドウサイズ

Internet Explorer の使用時に、元のウィンドウに表示するレスポンスの最大許容サイズをバイト数で定義します。

この設定で指定したサイズを超えるレスポンスは新しいウィンドウに表示されます。これにより、エラーを発生させずにウィンドウが開きます。この設定がブランクの場合、最大制限は適用されません。デフォルト値は 400,000 バイトです。

Excel Server URL

Web Query が出力を Excel 2007 ファイル (.xlsx) フォーマットで表示するために使用するリソースの場所を指定します。

[Excel Server URL] ドロップダウンリストには、次の 2 つのオプションが表示されます。

Reporting Server JSCOM Application Server (デフォルト設定) 出力を Reporting

Server の JSCOM3 リスナに転送し、このリスナが出力を Excel ファイルフォーマットで表示します。この設定で使用される URL は、JSCOM3 リスナの URL です。SSL のサポートやデフォルト内部セキュリティ以外の認証タイプのサポートを必要とする場合は、このオプションを使用します。Web Query は JSCOM で構成され、デフォルトオプションは上書きされます。

デフォルト 出力をミッドティアの IBIExcel Servlet に転送し、この Servlet が出力を Excel ファイルフォーマットで表示します。この設定で使用される URL は、Web Query ミッドティアのデフォルト URL です。SSL のサポートやデフォルト内部セキュリティ以外の認証タイプのサポートが必要ない場合は、このオプションを使用します。これが、デフォルト設定のオプションです。

グラフサーバ URL

Web Query が出力をグラフィイメージフォーマットで表示するために使用するリソースの場所を指定します。

[グラフサーバ URL] ドロップダウンリストには、次の 2 つのオプションが表示されます。

- **デフォルト** 出力をミッドティアの IBI Graph Servlet に転送し、この Servlet が出力をグラフィイメージファイルフォーマットで表示します。この設定で使用される URL は、Web Query ミッドティアのデフォルト URL です。SSL のサポートやデフォルト内部セキュリティ以外の認証タイプのサポートが必要ない場合は、このオプションを使用します。これが、デフォルト設定のオプションです。

このオプションは、z/OS で必須です。その他のすべての環境では、構成オプションとして JSCOM3 をお勧めします。

- **Reporting Server JSCOM** 出力を Reporting Server の JSCOM3 リスナに転送し、このリスナが出力をグラフィイメージファイルフォーマットで表示します。この設定で使用される URL は、JSCOM3 リスナの URL です。SSL のサポートやデフォルト内部セキュリティ以外の認証タイプのサポートを必要とする場合は、このオプションを使用します。

TransIn/TransOut

transin/transout 処理 (Reporting Server にリクエストを送信する処理、Reporting Server から出力を返す処理) を行う完全修飾 Java クラスです。このクラスは、Client の Servlet 実装用のプラグインで使用されます。このクラスは、WFTransInOutInterface Java クラスを実装する必要があります。たとえば、このクラスを使用することにより、Reporting Server と Servlet 間で送受信されたデータを、双方向 (左から右の文字列、右から左の文字列) で解析できるようになります。

プラグインクラス

Db2 Web Query Servlet が呼び出すプラグインクラスの修飾名を指定します。デフォルトの状態では、この変数は ibi.webfoc.WFEXTDefault に設定されています。これは、Db2 Web Query が提供するデフォルトのプラグインであり、役立つ関数が格納されています。

参照

機能診断/トレース設定

機能診断/トレース設定は、現在の Web Query 環境のシステムトレースおよびシステムログ収集について、特定の機能を定義します。

テストページ

HTTP リクエストのテストおよび RESTful Web サービスのテストに使用するページを有効にします。デフォルト設定で、このチェックはオンになっています。実稼動環境では、このページを無効にすることができます。

HTTP リクエストのテストページの URL は次のとおりです。

http://host:port/context_root/WFServlet?IBFS1_action=TEST

および

http://host:port/context_root/WFServlet?IBFS1_action=TEST1

自動セッショントレースレベル

Web Query セッションのデフォルトトレースレベルを設定します。この設定に割り当てたセッショントレースレベルは、セッションビューアメインページの [トレースレベル] 列のデフォルト値として表示されます。トレースファイルに収集されるイベントのレベルは、トレースレベルで識別されます。トレースレベルの範囲は、概要レベルのトレースのみを収集する [基本] から、すべてのイベントのトレースを収集する [サーバ] までがあります。管理者は、このデフォルト値をセッションごとに変更することができます。デフォルト値は [オフ] に設定されています。この設定では、トレースは収集されません。

プロシージャトレースのデフォルトオプション

プロシージャファイルのコマンド実行から取得される ECHO トレースおよび SQL トレースのデフォルトレベルを設定します。プロシージャファイルでは、&ECHO 変数により、コマンドが実行されるたびにコマンドラインが表示されるため、プロシージャのテストやデバッグに役立ちます。すべての SQL リクエストおよびレスポンスイベントから取得されるトレースのレベルです。デフォルト値は [ECHO ON, SQL ON] に設定されています。この設定では、プロシージャファイルの ECHO トレースと SQL トレースの両方が有効になります。管理者は、リストから別の組み合わせを選択してデフォルト値を変更することができます。

JavaScript エラーレポートを有効にする

event.log ファイルおよびセッションビューアの JavaScript エラーメッセージの表示を有効にします。この設定の値は次のとおりです。

- **オン** JavaScript エラーを記録するエントリを event.log ファイルに追加し、これらをセッションビューアおよびセッションモニタに収集します。この設定がデフォルト値です。
- **オフ** このログ収集機能を無効にします。ただし、セッションビューアを使用する場合は、JavaScript エラーは、セッションビューアのトレースにも、event.log ファイルのエントリとしても追加されます。
- **なし** この機能を完全に無効にします。

ベストプラクティスとして、JavaScript エラーを event.log ファイルおよびセッションビューアのトレースに追加することをお勧めします。

完了時にすべての URL ログを取得

すべてのセッションに適用される URL リクエストメッセージログのデフォルトレベルを設定します。URL リクエストログのすべてのエントリは、リクエストログファイルに書き込まれます。このファイルは、管理コンソールの [機能診断] タブの [ログファイル] ページに表示されます。管理者は、[ログファイル] ページのリクエストエントリで別のログレベルを選択することで、特定のセッションに対してこのデフォルト値を上書きすることができます。この設定の値は次のとおりです。

- **オフ** URL リクエストイベントのログを収集しません。この設定がデフォルト値です。
- **オン** すべての URL リクエストイベントのログを収集します。HTTP POST メッセージのログエントリにはデータは含まれません。
- **完全** すべての URL リクエストイベントのログを収集します。HTTP POST メッセージのログエントリには、POST リクエストで送信されたデータが含まれます。

Web サービス SOAP 詳細

SOAP XML レスポンスに詳細なエラーメッセージを表示します。デフォルト設定で、このチェックはオンになっています。このチェックをオフにすると、管理者用の詳細情報がエンドユーザーに表示されなくなります。

参照

ESRI 設定

[ESRI] 設定では、ESRI ベースのマップをサポートするローカルアプリケーションへの接続を定義します。

ESRI On Premise

Web Query で ESRI ベースのマップを作成するために使用する内部 ArcGIS JavaScript API ソースのパスを指定します。デフォルト設定では、この値はブランクです。この設定では、内部ソースの使用は有効になっていません。ESRI マップを作成するための内部 ArcGIS JavaScript API の使用を有効にするには、その API のパスをこの設定に入力します。通常は、「/web_resource/arcgis_api」と入力します。

この設定では、デフォルト API として JavaScript ArcGIS API バージョン 3.15 を参照する必要があります。この API には、「<https://js.arcgis.com/3.15/>」からアクセスすることができます。ArcGIS JavaScript API zip ファイルは、「<https://developers.arcgis.com/downloads/>」からダウンロードすることができます。

ESRI ArcGIS JavaScript API についての詳細は、「<https://developers.arcgis.com>」を参照してください。

InfoAssist+ 用に ESRI On Premise を構成する方法についての詳細は、『InfoAssist+ 利用ガイド』の「ESRI On Premise 環境の構成」を参照してください。

参照

他の設定

[その他] 設定では、さまざまな構成設定を指定します。

OLAP を有効にする

OLAP 設定および機能を有効にします。このチェックをオンにすると、OLAP 機能が次の場所に表示されます。

- InfoAssist** [オートドリルダウン] および [OLAP 分析] メニューに表示される OLAP 関連機能のすべて ([OLAP オプション] パネル、[OLAP] パネル、リボンの [OLAP] ボタン、OLAP レポートを含む)。

デフォルト設定で、このチェックはオフになっています。

参照

パラメータプロンプトの設定

[パラメータのプロンプト] 設定は、Web Query でのパラメータプロンプトの動作を指定します。

Managed Reporting

Web Query の Managed Reporting 内のリクエストを対象に、パラメータのプロンプトを有効にするかどうかを指定します。利用可能な値には、次のものがあります。

- オフ** サイトレベルでのパラメータのプロンプトをオフにします。
- デフォルト値で実行 (XMLRUN)** -DEFAULT コマンドが設定されていない場合、オートプロンプト画面を表示します。変数の初期値がすべて設定されていれば、その値でプロシージャを実行します。これがデフォルト値です。
- 常にプロンプトを表示 (XMLPROMPT)** -DEFAULT コマンドが設定されている場合でも、オートプロンプト画面を表示します。すべての変数が -DEFAULT で指定されている場合も、オートプロンプト画面を表示します。-DEFAULT コマンドで指定された変数は、オートプロンプト画面を表示しません。

パラメータのプロンプトオフ時の動作

[Managed Reporting] (IBIMR_PROMPTING) が [常にプロンプトを表示] (XMLPROMPT) または [デフォルト値で実行] (XMLRUN) に設定されている場合、およびプロジェクトの [プロパティ] ダイアログボックスで [パラメータのプロンプト] のチェックがオフの場合に、Managed Reporting 内のプロジェクト (FEX) のパラメータプロンプトを有効または無効にします。利用可能な値には、次のものがあります。

- オフ パラメータのプロンプトを無効にします。
- デフォルト値で実行 (XMLRUN) -DEFAULT コマンドが設定されていない場合、オートプロンプト画面を表示します。変数の初期値がすべて設定されていれば、その値でプロジェクトを実行します。これがデフォルト値です。
- 常にプロンプトを表示 (XMLPROMPT) -DEFAULT コマンドが設定されている場合でも、オートプロンプト画面を表示します。すべての変数が -DEFAULT で指定されている場合も、オートプロンプト画面を表示します。-DEFAULT コマンドで指定された変数は、オートプロンプト画面を表示しません。

セルフサービス

オートプロンプトを有効または無効にします。利用可能な値には、次のものがあります。

- オフ オートプロンプトを無効にします。これがデフォルト値です。
- デフォルト値で実行 (XMLRUN) -DEFAULT コマンドが設定されていない場合、オートプロンプト画面を表示します。変数の初期値がすべて設定されていれば、その値でプロジェクトを実行します。
- 常にプロンプトを表示 (XMLPROMPT) -DEFAULT コマンドが設定されている場合でも、オートプロンプト画面を表示します。すべての変数が -DEFAULT で指定されている場合も、オートプロンプト画面を表示します。-DEFAULT コマンドで指定された変数は、オートプロンプト画面を表示しません。
- XML の表示 (構文エラー確認付きデバッグ) (XML) 変数が記述された XML ドキュメントをブラウザに表示します。この設定は内部的に使用され、デバッグおよび構文エラー確認用としてのみ使用することをお勧めします。
- XML の表示 (デバッグ) (XMLCHECK) 変数が記述された XML ドキュメントをブラウザに表示します。この設定は内部的に使用され、デバッグ用としてのみ使用することをお勧めします。

注意：Managed Reporting では、IBIMR_prompting という別の変数設定が使用されます。

静的リストコントロールすべての値を事前選択

実行時のレスポンシブオートプロンプトの複数選択静的リストパラメータで、すべての値の自動選択をデフォルト設定で有効にします。

このチェックがオン (TRUE) の場合、複数選択静的リストを含むレスポンシブオートプロンプトの選択リストパラメータには、デフォルト設定で、初期選択値として FOC_ALL が自動的に割り当てられます。これにより、これらのリストには、実行時の選択値としてすべての値が自動的に表示されます。ただし、複数選択静的リストに表示するデフォルト値が指定されている場合は、初期選択値としての FOC_ALL の自動割り当てがこの値で上書きされ、デフォルト値が初期選択値として表示されます。

このチェックがオフ (FALSE) の場合、複数選択静的リストを含むパラメータには、デフォルト設定で、初期選択値として FOC_ALL が自動的に割り当てられません。この場合、リスト内のすべての項目は、実行時に自動的に選択されません。複数選択静的リストに指定されたデフォルト値が含まれる場合、この値がデフォルト設定で表示されます。静的選択リストのすべての値をクエリに含めるには、ユーザは手動で [すべての値] オプションを選択するか、リスト内のすべての値を個別に選択する必要があります。

デフォルト設定では、このチェックはオフ (FALSE) になっています。

デフォルトオートプロンプトテンプレート

オートプロンプトイインターフェースのレイアウトを定義するテンプレートを指定します。

- Responsive** レスポンシブ実装および autoprompt_jqm.jsp テンプレートを使用します。これがデフォルト値です。
- HTML_TOP** HTML ベースの実装および autoprompt_top.html テンプレートを使用します。このテンプレートでは、パラメータがページ上部に横方向に表示されます。
- HTML_TOP_CHECKED** HTML ベースの実装および autoprompt_top_checked.html テンプレートを使用します。このテンプレートでは、[新規ウィンドウで実行] チェックボックスが選択され、デフォルト設定ですべてのレポートが新規ウィンドウで開きます。

選択なしの動作

動的複数選択リストで [選択なし] の値が選択された場合に、クライアントが変数に割り当てる値 (_FOC_NULL または FOC_NONE) を指定します。デフォルト値は _FOC_NULL です。

自動記述

レポートおよびグラフのパラメータの自動インデックス機能を有効にします。このチェックをオン (TRUE) にすると、ユーザがレポートまたはグラフを保存した際に、そのレポートまたはグラフの作成時に指定したパラメータに自動的にインデックスが付けられます。これにより、これらのパラメータに関する情報が即座に検索可能になり、より速やかに広範囲の検索結果が得られます。

このチェックは、デフォルトでオン (TRUE) に設定されています。

参照

Db2 Web Query スプレッドシートクライアント設定

[スプレッドシートクライアント] 設定では、スプレッドシートクライアントの認証方法を指定します。

セキュリティ

Db2 Web Query スプレッドシートクライアントで使用するログインのタイプを指定します。選択可能な値は、[Reporting Server] および [Managed Reporting] です。デフォルト値は [Managed Reporting] (MR) で、この値を変更することはできません。

フォームのみ

セキュリティ設定で [Managed Reporting] 認証が選択された場合に適用されます。次の値が使用可能です。

- はい** ユーザは、各自のレポートの作成に InfoAssist+ は使用できず、定義済みの adhoc フォームのみを使用できます。
- いいえ** ユーザは、定義済みの adhoc フォームまたは InfoAssist+ を使用して、各自のレポートを作成することができます。デフォルト値は [いいえ] (チェックオフ) です。

参照

セキュリティ

[セキュリティ] 設定は Web Query 環境での認証方法を管理します。

パスワードの変更を有効にする

ユーザによる Web Query ユーザ ID のパスワードの変更を許可します。このオプションは、デフォルト設定で選択されています。

ログアウト URL

Db2 Web Query からのログアウト時にユーザに提示する移動先 URL を定義します。デフォルト値は「/」です。この設定では、Db2 Web Query ログインページに戻ります。

Kerberos 構成の場合、この URL をデフォルト値の「/」ではなく、logon/logoff.jsp に設定するか、別の URL に設定します。

Web Query での Web Query Client 設定の変更

Client の各種設定は、管理コンソールの [構成] メニューでカテゴリ別に分類されています。各設定の横に表示される「初期値」という用語は、その値がインストール時のデフォルト値であり、URL リクエストで明示的に変数を設定することで、その値を上書きできることを示しています。

カスタム設定の理解

[カスタム設定] ページでは、標準設定の代わりにカスタム値を入力することで、現在の Web Query 環境をカスタマイズすることができます。

[カスタム設定] テキストボックスに入力した設定変更を保存すると、その変更は /qibm/UserData/qwebqry/base80/client/wfc/etc ディレクトリ内の site.wfs ファイルに書き込まれます。このページを使用して設定に新しい値を割り当てるとき、その設定に割り当てられているデフォルト値が新しい値で上書きされます。新しいバージョンにアップグレードした場合でも、値の上書きは継承されます。

カスタム設定を保存した後でも、入力したテキストがこのページに保持されます。コメントを使用して、特定の更新内容を識別したり、更新内容に関する情報を追加したりできます。

手順

カスタム設定を構成するには

[カスタム設定] ページで設定を構成できるのは管理者のみです。

1. 管理コンソールの [構成] タブで、[カスタム設定] をクリックします。
2. [カスタム設定] テキストボックス上部の最終コメントステートメントまたは最後に入力したカスタム設定エントリの下に、カスタム設定を構成する変数、設定、コマンド、コメントを入力します。

このコマンドを実行するアプリケーションまたはオペレーティングシステムで要求されるフォーマットを使用します。

カスタム設定に加えた変更の履歴追跡を容易にするには、変更内容ごとにコメントを使用して各変更を区別します。

3. 暗号化されたフォーマットでカスタム設定を保存するには、[暗号] のチェックをオンにします。

注意：このチェックをオンにした場合でも、[カスタム設定] テキストボックスに入力した設定は、暗号化されていないフォーマットで保持されます。

4. 構成の完了後、[保存] をクリックします。
5. 確認メッセージのダイアログボックスで [OK] をクリックします。
6. [カスタム設定] ページがクリアされた後、[カスタム設定] テキストボックスで更新したコメント、設定、コマンドを確認するには、[カスタム設定] をクリックします。

言語の切り替えのカスタマイズ

ログインページで選択可能にする言語をカスタマイズするには、[言語の切り替え] 設定を有効にします。

手順

言語の切り替えをカスタマイズするには

1. 管理コンソールの [構成] タブで、[言語の切り替え] をクリックします。
[言語の切り替え] ページが開き、[NLS 設定] ページで選択したコードページに対して使用可能な言語のリストが表示されます。デフォルト設定では、[言語の切り替え] のチェックはオフで、すべての言語のチェックボックスが無効になっています。
2. 下図のように、[言語の切り替えを有効にする] のチェックをオンにして、パネル内のすべての言語のチェックボックスを有効にします。

Client Code Page: 65001 - Unicode (UTF-8)

Enable Dynamic Language

<input checked="" type="checkbox"/>	Locale	Language Code
<input checked="" type="checkbox"/>	Chinese - Simplified GB	zh
<input checked="" type="checkbox"/>	Chinese - Traditional Big-5	tw
<input checked="" type="checkbox"/>	English	en
<input checked="" type="checkbox"/>	French - Canadian	fr
<input checked="" type="checkbox"/>	French - Standard	fr
<input checked="" type="checkbox"/>	German	de
<input checked="" type="checkbox"/>	Italian	it
<input checked="" type="checkbox"/>	Japanese	ja
<input checked="" type="checkbox"/>	Portuguese - Brazilian	br
<input checked="" type="checkbox"/>	Spanish	es

[言語の切り替えを有効にする] のチェックをオンにし、1つ以上の言語を選択すると、すべてのログインページで [言語] メニューが有効になります。

3. ログインページおよび [言語] メニューに表示する言語のチェックをオンにします。
4. ログインページの [言語] メニューにすべての言語を表示するには、[ロケール] 見出しのチェックをオンにします。
5. [保存] をクリックします。
6. 「保存しました」というメッセージで [OK] をクリックします。

注意：ログインページの [言語] メニューから言語を除外する場合は、除外する言語のチェックをオフにします。

出力先変更設定の理解

DB2 Web Query Client の出力先変更設定は、管理コンソールの [出力先変更設定] ページで表示または編集することができます。ただし、出力先変更設定を変更する前に、技術サポートに設定変更について確認してください。

出力先変更設定を有効にすると、リクエストの実行時にレポート出力を一時ディレクトリに保存することができます。次にブラウザが HTTP コールを発行して、一時的に格納された出力を取得して表示します。

出力先変更設定をオフにすると、出力レポートは、リクエスト実行後に即座にブラウザに表示されます。

出力先変更設定を変更するには、管理コンソールの [構成] タブで、[出力先変更設定] をクリックします。下図のように、[出力先変更設定] パネルが開きます。

Redirection Settings

WebFOCUS Extension	Content Type	Format	Redirect	Server Extension	Save Report	Client Extension	IBFS Format
.acx	text/plain	ascii	no ▾	ACCESS	no ▾	.acx	ascii
.bmp	image/bmp	binary	no ▾	BMP	no ▾	.bmp	binary
.cfg	text/cfg	ascii	no ▾	N/A	no ▾	.cfg	ascii
.class	java/*	binary	no ▾	N/A	no ▾	.class	ascii
.css	text/css	binary	no ▾	CSS	no ▾	.css	ascii
.csv	application/csv	ascii	yes ▾	N/A	no ▾	.csv	ascii
.dif	application/x-dif	ascii	yes ▾	N/A	no ▾	.dif	ascii
.doc	application/msword	ascii	yes ▾	DOC	no ▾	.doc	ascii
.docx	application/vnd.openxml	binary	no ▾	DOCX	no ▾	.docx	binary
.e97	application/vnd.ms-excel	ascii	no ▾	N/A	no ▾	.e97	ascii
.err	text/plain	ascii	no ▾	ERRORS	no ▾	.err	ascii
.fex	text/plain	ascii	no ▾	FOCEXEC	no ▾	.fex	ascii
.foc	application/foc	binary	no ▾	FOCUS	no ▾	.foc	binary
.for	text/plain	ascii	no ▾	N/A	no ▾	.for	ascii
.ftm	application/x-ftm	ascii	no ▾	FOCTEMP	no ▾	.ftm	ascii
.gfa	application/gfa	binary	no ▾	N/A	no ▾	.gfa	binary
.gif	image/gif	binary	no ▾	GIF	no ▾	.gif	binary
.hex	text/plain	ascii	no ▾	N/A	no ▾	.hex	ascii

手順

出力先変更設定を変更するには

1. 管理コンソールの [構成] タブで、[出力先変更設定] をクリックします。
2. 出力を一時ディレクトリに保存する拡張子の [リダイレクト] 列で [はい] を選択します。
3. ブラウザでレポート出力を開くか、保存するかの選択をユーザに要求する場合は、[保存レポート] 列で [はい] を選択します。[保存レポート] が [はい] に設定され、リクエストで AS 名が指定されている場合は、レポート出力に AS 名が保持されます。

たとえば、リクエストで ON TABLE PCHOLD AS MYREPORT FORMAT PDF を指定し、.pdf 拡張子の [保存レポート] を [はい] に設定すると、ユーザは出力を「MYREPORT.pdf」として開いたり保存したりすることができます。指定された AS 名は、ブラウザには大文字で返されます。[保存レポート] が [はい] に設定され、リクエストで AS 名が指定されていない場合は、ランダムなファイル名が生成されます。

重要: PNG、SVG、GIF、JPEG、または JPG フォーマットでプロジェクトに指定された GRAPH リクエストの [保存レポート] 機能を活用するには、次のことを実行する必要があります。

- htm 拡張子の [保存レポート] を [はい] に設定します。

サーバサイド GRAPH リクエストを実行すると、実際のグラフ出力へのリンクを含む HTM ファイルが作成されます。このグラフ出力は、一時イメージファイルとして .jpeg、.jpg、.gif、.svg、.png のいずれかの拡張子で保存されているファイルです。

- GRAPH リクエスト実行時に、出力を聞くか保存するかの選択が要求された場合、[保存] を選択すると、この出力は、グラフィックの参照のみが含まれた HTM ファイルとして保存されます。これは、Client 構成の一時ファイルの期限切れ設定によって、最終的には期限切れとなり、サーバから削除されます。
 - GRAPH リクエストの出力を保存するには、保存された HTM ファイルを開き、グラフィックを右クリックして [名前を付けて画像を保存] を選択し、ディスクに永久保存します。これを実行すると、HTM 出力ファイルでは、保存されたイメージファイルを完全参照するよう変更することができます。
4. 出力先変更設定を暗号化する場合は、ウィンドウ最下部の [暗号] のチェックをオンにします。
 5. [保存] をクリックして、[出力先変更設定] パネルで加えた変更を保存します。

InfoAssist のプロパティ

InfoAssist の機能の表示および使用は、管理コンソールの [InfoAssist のプロパティ] ページの設定に基づいて決定されます。InfoAssist は、コンテンツを作成または更新する際に使用するツールです。

[InfoAssist のプロパティ] ページを開くには、管理コンソールで [構成] タブをクリックし、下方向へスクロールして [InfoAssist のプロパティ] をクリックします。このページで、InfoAssist の各オプションを有効または無効にすることができます。

参照**InfoAssist ホームタブプロパティの理解**

InfoAssist の [ホーム] タブでよく使用するプロパティおよびオプションを有効にするかどうかを制御します。次のプロパティがあります。

ライブプレビューモードを使用する

デフォルト設定で InfoAssist をライブプレビューモードで起動するか、クエリデザインモードで起動するかを指定します。[はい] を選択した場合、デフォルト設定で InfoAssist がライブプレビューモードで起動します。[はい] を選択しない場合、InfoAssist はクエリデザインモードで起動します。このオプションの [ユーザの上書きを許可] のチェックをオンにすると、ユーザは、管理者が指定したデフォルト設定を変更することができます。

最大レコード数

[ホーム] タブの [最大レコード数] メニューを有効にします。[表示] を選択しない場合、[最大レコード数] メニューは、InfoAssist インターフェースから削除されます。

テーマ

InfoAssist のレポートおよびグラフにさまざまな色のスタイルを設定するスタイルシートテーマを提供します。ユーザは、標準の InfoAssist テーマを選択することも、社内で作成されたカスタムカスケードスタイルシートテーマを選択することもできます。

ページ見出し

[ホーム] タブの [ページ見出し] メニューを有効にします。このメニューを使用して、レポート出力の各ページに見出しありたは脚注を追加することができます。

レポート見出し

[ホーム] タブの [レポート見出し] メニューを有効にします。このメニューを使用して、レポート出力の先頭ページに見出しありたは脚注を追加することができます。

参照**InfoAssist フォーマットタブプロパティの理解**

レポートまたはグラフの場合、InfoAssist の [ホーム] タブの [フォーマット] グループに出力ファイルフォーマットオプションのリストが表示されます (例、HTML、PDF、Excel)。これらのオプション以外に、レポートまたはグラフの作成時に使用可能なレイアウト機能および表示機能を [フォーマット] タブに表示するオプションもあります。このセクションの各種設定を使用して、これらの両方のタイプのオプションを表示するかどうかを制御することができます。

注意：このセクションの設定は、ビジュアライゼーションの [フォーマット] タブの機能には影響しません。

Analytic PDF

InfoAssist での Analytic PDF フォーマットの使用を有効にします。Analytic PDF は、PDF レポートに Analytic Document のポータビリティとインタラクティブ機能が追加されたフォーマットです。出力結果はオフライン分析のために設計され、フィルタ、ソート、グラフなど自己完結型レポートの分析処理をサポートするために必要なデータおよび JavaScript ツールがすべて含まれています。

このチェックをオンにした場合、[出力ファイルフォーマット] ドロップダウンリストのオプションとしてこのフォーマットが使用可能になります。[出力ファイルフォーマット] ドロップダウンリストは、InfoAssist ホームページのリボンの [フォーマット] グループから開きます。また、[InfoAssist のプロパティ] ページの [ツールオプションダイアログ] の [デフォルト] セクションの、[レポート出力フォーマット]、[グラフ出力フォーマット]、[ドキュメント出力フォーマット] の各ドロップダウンリストからデフォルト出力フォーマットとして選択することもできます。

デフォルト設定では、このチェックはオフになっています。

Analytic Document

InfoAssist での Analytic Document フォーマットの使用を有効にします。Analytic Document は、HTML レポートに Analytic Document のポータビリティとインタラクティブ機能が追加されたフォーマットです。出力結果はオフライン分析のために設計され、フィルタ、ソート、グラフなど自己完結型レポートの分析処理をサポートするために必要なデータおよび JavaScript ツールがすべて含まれています。

このチェックをオンにした場合、[出力ファイルフォーマット] ドロップダウンリストのオプションとしてこのフォーマットが使用可能になります。[出力ファイルフォーマット] ドロップダウンリストは、InfoAssist ホームページのリボンの [フォーマット] グループから開きます。また、[InfoAssist のプロパティ] ページの [ツールオプションダイアログ] の [デフォルト] セクションの、[レポート出力フォーマット]、[グラフ出力フォーマット]、[ドキュメント出力フォーマット] の各ドロップダウンリストからデフォルト出力フォーマットとして選択することもできます。

デフォルト設定で、このチェックはオンになっています。

その他の HTML (グラフ)

PNG、JPEG、GIF、SVG 出力フォーマットの使用を有効にします。デフォルト値は [PNG] です。[PNG] は、グラフ出力のフォーマットとして選択する値ではありません。

その他の PDF (グラフ)

PDF/SVG および PDF/GIF 出力フォーマットの使用を有効にします。デフォルト値は [PDF/SVG] です。

Excel (EXL2K)

Excel 2000 出力フォーマットの使用を有効にします。Excel では、ほとんどのスタイルシートの属性がサポートされるため、完全なレポートのフォーマット設定が可能です。レポートを表示するコンピュータには、Microsoft Excel 2000 がインストールされている必要があります。

このチェックをオンになると、この出力フォーマットオプションが、[ツールオプションダイアログのデフォルト] セクションの [出力フォーマット] ドロップダウンリストから選択可能になります。

デフォルト設定で、このチェックはオンになっています。

Excel Formula (EXL2K FORMULA)

[Excel (EXL2K)] オプションが選択されている場合に、[Excel Formula (EXL2K FORMULA)] の使用を有効にします。

デフォルト設定で、このチェックはオンになっています。

Excel (XLSX)

Excel 2007 出力フォーマットの使用を有効にします。レポートを表示するコンピュータには、Microsoft Excel 2007 がインストールされている必要があります。

このチェックをオンになると、この出力フォーマットオプションが、[InfoAssist のプロパティ] ページの [ツールオプションダイアログのデフォルト] セクションの各出力フォーマットドロップダウンリストから選択可能になります。

デフォルト設定で、このチェックはオンになっています。

Excel Formula (XLSX FORMULA)

[Excel (XLSX)] オプションが選択されている場合に、[Excel Formula (XLSX FORMULA)] の使用を有効にします。

デフォルト設定で、このチェックはオンになっています。

Excel Pivot (EXL2K PIVOT)

Excel 2000 PivotTable 出力フォーマットの使用を有効にします。PivotTable は、複雑なデータを分析するための Excel ツールです。

デフォルト設定で、このチェックはオフになっています。

Excel CSV

カンマ区切り値 (CSV) ファイルフォーマットの使用を有効にします。

このチェックをオンになると、InfoAssist で [Excel CSV] フォーマットオプションの使用が可能になり、[ホーム] タブの [フォーマット] グループオプションリストの [Excel] フォーマットオプション下に表示されます。このチェックをオフになると、このオプションは使用できなくなり、[フォーマット] グループオプションリストに表示されません。

デフォルト設定で、このチェックはオンになっています。

HTML

HTML ページレポートフォーマットの使用を有効にします。

このチェックをオンになると、この出力フォーマットオプションが、[InfoAssist のプロパティ] ページの [ツールオプションダイアログのデフォルト] セクションの各出力フォーマットドロップダウンリストから選択可能になります。

InfoMini の即時実行

InfoMini の即時実行オプションの使用を有効にします。デフォルト設定で、このチェックはオンになっています。

その他のグラフタイプ

ブロック地図、メータグラフ、パレートなど、より複雑なグラフの作成を可能にします。

Web ビューア

レポート出力を一度に 1 ページずつ表示することを可能にします。ユーザは、出力画面の下部に表示されるナビゲーションメニューを使用して各ページに移動することができます。このオプションは、HTML または Active Report 出力フォーマットが選択されている場合にのみ有効になります。

PDF

PDF フォーマットの使用を有効にします。

このチェックをオンになると、この出力フォーマットオプションが、[InfoAssist のプロパティ] ページの [ツールオプションダイアログのデフォルト] セクションの各出力フォーマットドロップダウンリストから選択可能になります。

PowerPoint (PPT)

PowerPoint 2000 出力フォーマットの使用を有効にします。レポートを表示するコンピュータには、Microsoft PowerPoint 2000 以降がインストールされている必要があります。

このチェックをオンになると、この出力フォーマットオプションが、[InfoAssist のプロパティ] ページの [ツールオプションダイアログのデフォルト] セクションの各出力フォーマットドロップダウンリストから選択可能になります。

PowerPoint (PPTX)

PowerPoint 2007 出力フォーマットの使用を有効にします。レポートを表示するコンピュータには、Microsoft PowerPoint 2007 以降がインストールされている必要があります。

このチェックをオンになると、この出力フォーマットオプションが、[InfoAssist のプロパティ] ページの [ツールオプションダイアログのデフォルト] セクションの各出力フォーマットドロップダウンリストから選択可能になります。

積み重ねメジャー

レポートの最初の列にすべての数値フィールド名と値が表示されます。[積み重ねメジャー] 機能は HTML、Excel、PowerPoint 出力フォーマットが選択されている場合にのみ有効になります。

ユーザ選択

レポートの実行時に、ユーザによる出力フォーマットの変更を可能にします。

参照

InfoAssist 表示タブプロパティの理解

デザインモード、出力場所、データ表示など、InfoAssist のさまざまなレポートコンポーネントの表示をカスタマイズできます。InfoAssist の [表示] タブに表示される次のプロパティを構成することができます。

表示タブの表示

[表示] タブおよびそのメニューオプションをすべて有効にします。このチェックをオフにした場合、InfoAssist インターフェースに [表示] タブは表示されません。

データパネル

データパネルの設定をカスタマイズできます。有効値は、[論理] (デフォルト)、[リスト]、[構造] です。

クエリ

レポート作成時の [フィルタ]、[BY] および [ACROSS]、[SUM] などのクエリコンポーネントの表示方法をカスタマイズできます。有効値は、[ツリー] (デフォルト)、[縦横表示]、[縦表示] です。このオプションの [ユーザの上書きを許可] のチェックをオンになると、ユーザは、管理者が指定したデフォルト設定を変更することができます。

参照

InfoAssist ツールオプションダイアログのデフォルトプロパティの理解

管理者は、[ツールオプションダイアログのデフォルト] セクションの設定で、デフォルトツール設定を指定することができます。各オプションの [ユーザの上書きを許可] のチェックをオンにすると、ユーザは、管理者が指定したデフォルト設定を変更することができます。ただし、管理者は、別のグループのいずれかで無効にされているデフォルト値を指定することはできません。たとえば、[フォーマットタブ] セクションで [Analytic PDF] フォーマットを無効にした場合、[ツールオプションダイアログのデフォルト] セクションで、[レポート出力フォーマット]、[グラフ出力フォーマット]、[ドキュメント出力フォーマット] のデフォルトとしてこのフォーマットを設定しようとすると、エラーメッセージが表示されます。

レポート出力フォーマット

レポートのデフォルトフォーマットを設定します。有効値は、[HTML]、[Analytic Document]、[PDF]、[Analytic PDF]、[EXL07]、[EXL2K]、[PowerPoint (PPT)]、[PowerPoint (PPTX)] です。このリストの各フォーマットオプションは、[InfoAssist のプロパティ] ページの [フォーマットタブ] セクションで各フォーマットのチェックがオンに設定されている場合にのみ選択できます。特定のフォーマットのチェックがオフに設定されている場合、このリストからそのフォーマットを選択すると、フォーマットオプションが無効であることを示す警告メッセージが表示されます。デフォルト値は [HTML] です。

グラフ出力フォーマット

グラフのデフォルトフォーマットを設定します。有効値は、[HTML]、[HTML5]、[Analytic Document]、[PDF]、[Analytic PDF]、[EXL07]、[EXL2K]、[PowerPoint (PPT)]、[PowerPoint (PPTX)] です。このリストの各フォーマットオプションは、[InfoAssist のプロパティ] ページの [フォーマットタブ] セクションで各フォーマットのチェックがオンに設定されている場合にのみ選択できます。特定のフォーマットのチェックがオフに設定されている場合、このリストからそのフォーマットを選択すると、フォーマットオプションが無効であることを示す警告メッセージが表示されます。デフォルト値は [HTML5] です。

レイアウト出力フォーマット

InfoAssist で生成されるレイアウトのデフォルトフォーマットを設定します。有効値は、[HTML]、[Analytic Document]、[PDF]、[Analytic PDF]、[EXL07]、[EXL2K]、[PowerPoint (PPT)]、[PowerPoint (PPTX)] です。このリストの各フォーマットオプションは、[InfoAssist のプロパティ] ページの [フォーマットタブ] セクションで各フォーマットのチェックがオンに設定されている場合にのみ選択できます。特定のフォーマットのチェックがオフに設定されている場合、このリストからそのフォーマットを選択すると、フォーマットオプションが無効であることを示す警告メッセージが表示されます。デフォルト値は [PDF] です。

ページの向き

レポートおよびグラフのデフォルトページ方向を設定します。有効値は [縦] と [横] です。デフォルト値は [縦] です。このオプションの [ユーザの上書きを許可] のチェックをオンにすると、ユーザは、管理者が指定したデフォルト設定を変更することができます。

ページサイズ

レポートおよびグラフのデフォルトページサイズを設定します。有効値は、[A3]、[A4]、[A5]、[Letter]、[Tabloid]、[Legal]、[PPT-SLIDE]、[E] です。デフォルト値は [Letter] です。このオプションの [ユーザの上書きを許可] のチェックをオンにすると、ユーザは、管理者が指定したデフォルト設定を変更することができます。

データプレビュー方法

レポートのデフォルtplレビュー方法を、サンプルデータ、データソースの実際のデータのいずれかに設定します。有効値は、[ライブ] および [サンプル] です。デフォルト値は [ライブ] です。このオプションの [ユーザの上書きを許可] のチェックをオンにすると、ユーザは、管理者が指定したデフォルト設定を変更することができます。

最大レコード数

[インタラクティブ] デザインビューが選択されている場合に、データソースから取得するデフォルト設定の行数を設定します。これは、ユーザが大規模なデータを扱う際のレスポンス時間の短縮に役立ちます。この設定は、レポート作成時にのみ適用されます。レコード数の制限の設定は、実行時のレポート出力には影響を与えません。有効値は、[すべて]、[1]、[10]、[50]、[100]、[500]、[1000]、[2000]、[5000]、[10000] です。デフォルト値は 500 行です。このオプションの [ユーザの上書きを許可] のチェックをオンにすると、ユーザは、管理者が指定したデフォルト設定を変更することができます。

出力ターゲット

レポートおよびグラフのデフォルト位置を設定します。有効値は、[單一タブ]、[新規タブ]、[單一ウィンドウ]、[新規ウィンドウ] です。デフォルト値は [單一タブ] です。このオプションの [ユーザの上書きを許可] のチェックをオンにすると、ユーザは、管理者が指定したデフォルト設定を変更することができます。

Analytic Document

InfoAssist のクリックアクセスツールバーから開く [プロシージャの設定] ダイアログボックスの [Analytic Document] 設定のデフォルト値を指定します。有効な値は、[DESIGNER スタイル] と [レガシー] です。[InfoAssist のプロパティ] ページでは、[DESIGNER スタイル] がデフォルト設定で選択されています。

この設定の値は、InfoAssist で Analytic Document フォーマットを使用したレポート、グラフ、レイアウトの実行時に使用するデフォルト設定のインターフェースを指定します。ユーザが InfoAssist で Analytic Document フォーマットのレポート、グラフ、レイアウトを新規作成する場合、[プロジェクトの設定] ダイアログボックスに表示される [Analytic Document] 設定から別のオプションを選択すると、[InfoAssist のプロパティ] ページの設定で指定したデフォルト値が上書きされます。

InfoAssist/BI Portal スタイルシート

InfoAssist およびポータルで使用するスタイルシートを設定します。[スタイルシートの変更] をクリックすると、[テンプレート - 定義済みスタイルシートを参照] ウィンドウが開きます。デフォルト設定で表示される値は [Warm.sty] です。

このオプションの [ユーザの上書きを許可] のチェックをオンにすると、ユーザは、管理者が指定したデフォルト設定を変更することができます。

Visualization スタイルシート

ビジュアライゼーションの作成時に使用するスタイルシートを設定します。[スタイルシートの変更] をクリックすると、[テンプレート - 定義済みスタイルシートを参照] ウィンドウが開きます。デフォルト設定で表示される値は [Warm.sty] です。

このオプションの [ユーザの上書きを許可] のチェックをオンにすると、ユーザは、管理者が指定したデフォルト設定を変更することができます。

HTML のエンコード

データ内のスクリプトタグをエンコードします。これにより、スクリプトタグが置き換えられ、ブラウザで実行されなくなります。デフォルト値は [はい] です。この設定は、プロジェクトに ON TABLE SET HTMLENCODE ON コマンドを追加します。

Web ビューアを有効にする

InfoAssist ユーザがレポートを一度に 1 ページずつ表示できるようにします。出力画面の下部に表示されるナビゲーションメニューを使用して、各ページを表示できます。このオプションは、HTML または Active Report 出力フォーマットが選択されている場合にのみ有効になります。

キャッシュから取得する行数

バイナリファイルに格納されたキャッシュデータから、出力ウィンドウに表示する 1 回あたりの行数を指定します。デフォルト値は 100 行です。

HTML の高さを固定

InfoAssist で、リボンの [フォーマット] タブの [ナビ] グループから、[固定] オプションでレポートエリアの高さを自動的に固定する方法を指定します。

この設定で [自動調整] を指定した場合、[固定] オプションを選択して生成したレポートで、表示されるウィンドウの高さが自動的に調整されます。これがデフォルト値です。

この設定で [固定] を指定した場合、[固定] オプションを選択して生成したレポートで、表示されるウィンドウのサイズに関わらず、固定高さが 4 インチに自動的に設定されます。

HTML アコーディオン

InfoAssist で、リボンの [フォーマット] タブの [ナビ] グループから、[アコーディオン] オプションで、表示されるコンテナに合わせてデータのサイズを自動的に変更するアコーディオンレポートを表示するかどうかを指定します。

この設定で [自動調整] を指定した場合、[アコーディオン] オプションを選択して生成したレポートで、表示されるコンテナのサイズに合わせてデータ表示のサイズが自動的に変更され、最大データ値または列タイトルのサイズに基づいて列幅が自動的に調整されます。これがデフォルト値です。

この設定で [レガシー] を指定した場合、[アコーディオン] オプションを選択して生成したレポートで、表示されるコンテナのサイズに合わせてデータ表示のサイズが自動的に変更されず、列幅も自動的に調整されません。

グローバル設定でのキャッシュの有効化

InfoAssist でキャッシュオプションを使用すると、Analytic Document フォーマットを使用したレポート出力の先頭ページのみをブラウザに送信し、後続のページをの一時キャッシュから取得することが可能になります。キャッシュは、ローカルで InfoAssist の [Analytic Document オプション] ダイアログボックスの [詳細] タブから有効にすることができます。管理コンソールで関連する [InfoAssist のプロパティ] の設定を構成することで、キャッシュオプションをグローバルに有効化することができます。

手順

InfoAssist のプロパティでキャッシュを有効化するには

管理コンソールの設定を使用して InfoAssist のキャッシュをグローバルに有効化するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールを開きます。
2. [構成] タブで [InfoAssist のプロパティ] をクリックします。
3. [InfoAssist のプロパティ] ページの [ツールオプションダイアログのデフォルト] セクションで、次の手順を実行します。
 - a. [Web ビューアを有効にする] 設定で、[はい] のチェックをオンにします。
 - b. [キャッシュから取得する行数] 設定で、デフォルト値の 100 を受容するか、ユーザ要件に適合する別の値を入力します。

4. ページ下部の [保存] をクリックします。
5. 変更が保存されたことを示すメッセージで [OK] をクリックします。
6. 管理コンソールを閉じます。

手順

キャッシュ構成を検証するには

InfoAssist が、管理コンソールで構成したグローバル設定を使用することを確認するためには、次の手順を実行します。

1. InfoAssist を起動して、レポートを新規作成するか、既存のレポートを編集します。
2. [ホーム] タブの [フォーマット] グループで、[出力ファイルフォーマット] リストをクリックし、[Analytic Document] または [Analytic PDF] を選択します。
3. [フォーマット] タブをクリックします。
4. [ナビ] グループで、[Web ビューア] オプションがハイライト表示されていることを確認します。
5. [機能] グループで、[Analytic Document オプション] を選択します。
6. [Analytic Document オプション] ダイアログボックスで、[詳細] をクリックします。
7. [取得行数] テキストボックスの値と、管理コンソールの [キャッシュから取得する行数] 設定で受容した値または入力した値を比較します。

これら 2 つの値が一致する場合、管理コンソールの構成が正常に更新されています。一致しない場合は、管理コンソールの設定の構成を確認してください。

参照

InfoAssist ファイルオプションの理解

ユーザが HOLD ファイルを作成して保存する際に選択可能なファイルタイプを設定します。

バイナリ

レポートまたはグラフのデータをバイナリ値として数値フィールドに格納します。バイナリファイルには、.ftm 拡張子が使用されます。

FOCUS

レポートまたはグラフのデータを、FOCUS データベースの要件に適合するセグメント構造にテキストとして格納します。FOCUS ファイルには、.foc 拡張子が使用されます。

フィールド名付きカンマ区切りテキストファイル

レポートまたはグラフのデータをフィールド順にテキストとして格納します。文字フィールドは引用符で囲まれます。各フィールドはカンマ (,) で区切られ、フィールド名が先頭行に挿入されます。フィールド名付きカンマ区切りテキストファイルには、.csv 拡張子が使用されます。

テキスト

レポートまたはグラフのデータをフィールド順にテキストとして格納しますが、区切り文字およびフィールド名は挿入されません。テキストファイルには、.ftm 拡張子が使用されます。

タブ区切り

レポートまたはグラフのデータをフィールド順にテキストとして格納します。各フィールドは、タブ文字で区切られます。タブ区切りテキストファイルには、.tab 拡張子が使用されます。

フィールド名付きタブ区切りテキストファイル

レポートまたはグラフのデータをフィールド順にテキストとして格納します。各フィールドはタブ文字で区切れられ、フィールド名が先頭行に挿入されます。フィールド名付きタブ区切りテキストファイルには、.tab 拡張子が使用されます。

データベーステーブル

レポートまたはグラフのデータを、SQL データベースフォーマットに適合するフィールド構造にテキストとして格納します。データベーステーブルファイルには、.sql 拡張子が使用されます。

データベーステーブル出力は、SQL データベースに対して実行する場合にのみ使用できます。

HYPERSTAGE

レポートまたはグラフのデータを、Hyperstage データベーステーブルフォーマットに適合するフィールド構造にテキストとして格納します。Hyperstage ファイルには、.bht 拡張子が使用されます。

Hyperstage 出力は、Reporting Server で Hyperstage アダプタが構成されている場合にのみ使用できます。

SQL スクリプト

レポートまたはグラフのデータを、SQL データベースフォーマットに適合するデータベーステーブルにインポート可能なシーケンシャルフィールド構造にテキストとして格納します。SQL スクリプトファイルには、.sql 拡張子が使用されます。

SQL スクリプト出力は、SQL データベースに対して実行する場合にのみ使用できます。

XML

レポートまたはグラフのデータを、XML (Extensible Markup Language) の規則に適合するフィールド構造にテキストとして格納します。各フィールドは、コンテンツを識別するタグで区切られます。XML ファイルには、.xml 拡張子が使用されます。

JSON

レポートまたはグラフのデータを、JSON (JavaScript Object Notations) の規則に適合する構造にテキストとして格納します。JSON ファイルは拡張子 .json を使用します。

参照

InfoAssist グラフタイプオプションの理解

Leaflet マップ

InfoAssist のグラフモードおよびビジュアライゼーションモードで Leaflet マップを使用する際に必要なアイコンを有効にします。2 つの Leaflet マップアイコンを有効にすると、モバイル対応インタラクティブマップ用の Leaflet オープンソース JavaScript ライブリに基づいて、コロプレスマップまたはプロポーショナルシンボル (バブル) マップが選択可能になります。

グラフモードでは、これらのアイコンは [グラフの選択] ダイアログボックスに表示されます。このダイアログボックスを開くには、[フォーマット] タブの [グラフタイプ] グループで [その他] をクリックします。[グラフの選択] ダイアログボックスで、[マップ] をクリックします。

ビジュアライゼーションモードでは、これらのアイコンは [ビジュアルの選択] ダイアログボックスに表示されます。このダイアログボックスを開くには、[ホーム] タブの [ビジュアル] グループで [変更] をクリックします。

この設定が選択されていない場合、Leaflet マップのアイコンは上記のいずれにも表示されません。デフォルト値はオンです。

参照

InfoAssist オートドリルダウンプロパティの理解

このセクションの各種設定を使用して、オートドリルダウン機能の一部であるドリルダウンナビゲーションの各オプションを有効にします。

シングルクリックナビゲート

シングルクリックナビゲートの使用を有効にします。シングルクリックナビゲートを有効にした場合、レポートまたはグラフの最上位のエントリまたは機能を 1 回クリックした際に、ディメンションの次のレベルに自動的にドリルダウンします。

デフォルト設定では、このチェックはオフです。この設定では、シングルクリックナビゲートが無効になり、最上位オートドリルダウンのエントリまたは機能を 1 回クリックした際に、ドリルダウンメニューが表示されます。このチェックをオンになると、シングルクリックナビゲートが有効になり、最上位オートドリルダウンのエントリまたは機能を 1 回クリックした際に、ドリルダウンメニューが表示されずにレポートまたはグラフが自動的にリフレッシュされ、選択したディメンションの次のレベルに基づいて結果が表示されます。

階層リンク

オートドリルダウンを有効にしたレポートまたはグラフの最上部に階層リンクを表示します。

デフォルト設定では、このチェックはオンです。この設定では、オートドリルダウンを有効にしたレポートまたはグラフに階層リンクが表示されます。このチェックをオフにすると、オートドリルダウンを有効にしたレポートまたはグラフに階層リンクは表示されません。

オートドリルダウンを有効にしたレポートまたはグラフでは、ディメンションのレベル間をドリルダウンした際に、現在レベルに到達するまでに通過した各レベルが一連のリンクとして階層リンクに表示されます。

[元に戻す] オプション

ドリルダウンメニューの [元に戻す] オプションの表示を有効にします。

デフォルト設定では、このチェックはオンです。この設定では、ドリルダウンメニューに [元に戻す] オプションが表示されます。このチェックをオフにすると、ドリルダウンメニューに [元に戻す] オプションは表示されません。

オートドリルダウンを有効にしたレポートまたはグラフで [元に戻す] オプションを選択すると、元のレポートに直接戻ることができます。

ドリルアップ

ドリルダウンメニューの [ドリルアップ] オプションの表示を有効にします。

デフォルト設定では、このチェックはオンです。この設定では、ドリルダウンメニューに [ドリルアップ] オプションが表示されます。このチェックをオフにすると、ドリルダウンメニューに [ドリルアップ] オプションは表示されません。

オートドリルダウンを有効にしたレポートまたはグラフで [ドリルアップ] オプションを選択すると、選択したディメンションの現在レベルから 1 つ上のレベルに基づく結果で表示が更新されます。

ドリルダウン

ドリルダウンメニューの [ドリルダウン] オプションの表示を有効にします。

デフォルト設定では、このチェックはオンです。この設定では、ドリルダウンメニューに [ドリルダウン] オプションが表示されます。このチェックをオフにすると、ドリルダウンメニューに [ドリルダウン] オプションは表示されません。

オートドリルダウンを有効にしたレポートまたはグラフで [ドリルダウン] オプションを選択すると、選択したディメンションの現在レベルから 1 つ下のレベルに基づいて出力結果が更新されます。

注意：この設定のチェックをオフにすると、[ドリルダウン] オプションが無効になるとともに、レポートおよびグラフの最上位エントリからのハイパーリンク、および階層リンクも表示されなくなります。また、[シングルクリックナビゲート] 設定のチェックがオフの場合に、[ドリルダウン] 設定のチェックもオフにすると、オートドリルナビゲートツールが実質的に無効になり、最上位ディメンション値のみが表示されたレポートまたはグラフが生成されます。[シングルクリックナビゲート] 設定のチェックをオンにし、レポートまたはグラフの最上位から下のレベルにエントリが含まれている場合、[ドリルダウン] 設定のチェックをオフにした場合でも、シングルクリックナビゲート機能により、これらの下位エントリに移動します。ただし、この設定によりドリルダウンメニューが表示されなくなるため、ユーザがレポートまたはグラフを元のレベルに戻すことも、上位にドリルアップすることもできなくなります。

参照

InfoAssist その他オプションの理解

2 部構成ファイル名の使用

このオプションを選択した場合、マスターファイルディレクトリへのパスを含めた 2 部構成ファイル名を使用する必要があります。このオプションを選択しない場合、1 部構成ファイル名を使用する必要があります。デフォルト値はオンです。

データソースツリーを展開する

データソースツリーを初期表示で展開するか、折りたたむかを指定します。このチェックをオンにした場合、ツリーは展開されて表示されます。このチェックをオフにした場合、ツリーは折りたたまれて表示されます。デフォルト値はオンです。

JOIN ツール

InfoAssist の [データ] タブに、[JOIN] メニューオプションを表示します。このチェックをオフにした場合、[データ] タブに [JOIN] メニューオプションは表示されません。デフォルト値はオンです。

レイアウトタブ

InfoAssist リボンの [レイアウト] タブを有効にします。このチェックをオフにした場合、InfoAssist リボンに [レイアウト] タブは表示されません。デフォルト値はオンです。

シリーズタブ

InfoAssist リボンの [シリーズ] タブを有効にします。[シリーズ] タブは、グラフおよびビジュアライゼーションを作成する場合に表示されます。[プロパティ]、[折れ線]、[円] の各メニューのグラフ作成プロパティおよびオプションにアクセスできます。このチェックをオフにした場合、InfoAssist リボンに [シリーズ] タブは表示されません。デフォルト値はオンです。

パスの適用を有効にする

[パスの適用] コンテナ  のデフォルト条件を設定します。[パスの適用] コンテナは、InfoAssist アプリケーションウィンドウの [リソース] パネルの [データ] ウィンドウ上部に表示されます。

[データ] ウィンドウのフィールドを [クエリ] ウィンドウのフィールドコンテナに移動すると、パスの適用によって、データソースツリーで使用可能なフィールドの表示が、フィールドコンテナに移動したフィールドへのマルチパスリレーションシップに基いて、有効な論理接続が設定されたフィールドに自動的に制限されます。

このチェックをオフにすると、この設定のデフォルト値 [パスの適用] コンテナがデフォルト設定で無効になります。この条件では、ユーザがフィールドを [クエリ] ウィンドウのフィールドコンテナに移動した場合も、データソースツリーの使用可能なフィールドの表示が変更されません。InfoAssist のセッションでは、ユーザは [パスの適用] コンテナをクリックすることでパスの適用を有効にすることができます。

このチェックをオンにすると、[パスの適用] コンテナがデフォルト設定で有効になります。この条件では、[クエリ] ウィンドウのフィールドコンテナに移動したフィールドに論理接続されていないデータソースツリーのフィールドは、淡色表示になり、使用できなくなります。InfoAssist のセッションでは、ユーザは [パスの適用] コンテナをクリックすることでパスの適用を無効にすることができます。

注意：新しいプロシージャを保存すると、[パスの適用] コンテナに設定された条件がこのプロシージャに保存されます。このプロシージャを InfoAssist アプリケーションウィンドウで再度開くと、[パスの適用] コンテナの条件が、[パスの適用を有効にする] 設定で指定した値ではなく、プロシージャに保存された値で設定されます。

HTML5 グラフ拡張機能の操作

[HTML5 グラフ拡張機能] ページには、下図のように、ローカルの Web Query に現在インストールされているすべての HTML5 グラフ拡張機能が表示されます。

HTML5 Chart Extensions

Get more Extensions

 com.ibi.arc	Name: Arc Chart Description: Arc Chart Version: 1.0 API Version: 1.0 Author: Three D Graphics Copyright: Three D Graphics Inc. URL: https://threedgeographics.com License: BSD 3-clause	<input checked="" type="checkbox"/> Enabled 
 com.ibi.chord	Name: Chord Diagram Description: Chord Diagram Version: 1.0 API Version: 1.0 Author: Three D Graphics Copyright: Three D Graphics Inc. URL: https://github.com/ibi/vf-extensions-chart/tree/master/com.tdg.chord License: BSD 3-clause	<input type="checkbox"/> Enable 
 com.ibi.liquid_gauge	Name: Liquid Gauge Chart Description: Fancy animated gauge chart with a liquid interior Version: 1.0 API Version: 1.0 Author: Information Builders Copyright: Information Builders Inc. URL: https://github.com/ibi/vf-extensions-chart/tree/master/com.ibi.liquid_gauge License: BSD 3-clause	<input checked="" type="checkbox"/> Enabled 
 com.ibi.marker	Name: Marker Chart Description: Simple Marker Chart Version: 1.0 API Version: 1.0 Author: Three D Graphics Copyright: Three D Graphics Inc. URL: https://threedgeographics.com License:	<input type="checkbox"/> Enable 

HTML5 グラフ拡張機能は、標準的な InfoAssist+ グラフを拡張したもので、非常に特殊なレポート作成およびデータ視覚化の要件に合わせてカスタマイズされたグラフが含まれます。

このページの機能を使用して、HTML5 グラフ拡張機能をアップロードしたり、これらの InfoAssist+ での使用を有効または無効にしたり、不要になった場合は Web Query からアンインストールしたりできます。

HTML5 グラフ拡張機能エントリの理解

HTML5 グラフ拡張機能の各エントリには、グラフ拡張機能およびその作成元を識別する詳細情報が表示され、ユーザの Web Query での使用に適しているかを判断することができます。

	<p>Name: Chord Diagram Description: Chord Diagram Version: 1.0 API Version: 1.0 Author: Three D Graphics Copyright: Three D Graphics Inc. URL: https://github.com/ibi/wf-extensions-chart/tree/master/com.tdg.chord License: BSD 3-clause</p>
---	---

各エントリでは、HTML5 グラフ拡張機能が、[名前]、[説明]、[バージョン]、[API バージョン] で識別されます。これらの詳細情報は、ユーザが使用するグラフ拡張機能を特定したり、ユーザのニーズに最も合ったバージョンを特定したりするのに役立ちます。[作成者] および [著作権] では、各グラフ拡張機能の作成元、および追加コピーの取得先の URL リンクが識別できます。[ライセンス] では、グラフ拡張機能の使用を可能にするライセンスのタイプが識別でき、ユーザはグラフ拡張機能の使用に関する制限およびライセンスを所有するユーザが開発者に対して持つ権利と義務について理解することができます。

HTML5 グラフ拡張機能の有効にする/有効化済みチェックボックスの理解

HTML5 グラフ拡張機能の各エントリには、このグラフ拡張機能が使用できるかどうかを示す [有効にする] / [有効化済み] チェックボックスが表示されています。このチェックボックスを使用して、管理者はこれらのグラフ拡張機能の使用を 2 段階で管理することができます。つまり、実際に使用する HTML5 グラフ拡張機能のみ有効とし、インストール済みの他のすべての HTML5 グラフ拡張機能は必要に応じて使用できるように保持することができます。

このチェックがオフの場合は、下図のように [有効にする] ラベルが表示され、チェックボックスを選択するとこのグラフ拡張機能が使用できるようになることが示されます。

	<p>Name: Chord Diagram Description: Chord Diagram Version: 1.0 API Version: 1.0 Author: Three D Graphics Copyright: Three D Graphics Inc. URL: https://github.com/ibi/wf-extensions-chart/tree/master/com.tdg.chord License: BSD 3-clause</p>	<input type="checkbox"/> Enable	X
---	---	---------------------------------	---

[有効にする] チェックボックスが選択された HTML5 グラフ拡張機能は、インストール済みですが、Web Query または InfoAssist+ で使用することができません。

このチェックボックスを選択すると、下図のように [有効化済み] ラベルが表示され、このグラフが使用可能になったことが示されます。



[有効化済み] チェックボックスが選択された HTML5 グラフ拡張機能はインストール済みであり、開発者は InfoAssist+ を利用したグラフの作成にこれを使用することができます。Web Query は、このグラフ拡張機能に含まれたファイルやディレクトリを、InfoAssist+ からの呼び出しの対象として識別し、このグラフ拡張機能のアイコンを [グラフの選択] メニューに表示します。グラフ拡張機能を使用するには、InfoAssist+ では、[フォーマット] タブのリボンの [グラフ] グループから [その他] を選択し、表示される [グラフの選択] ダイアログボックスから [HTML5 拡張] を選択します。

注意：[HTML5 グラフ拡張機能] ページでは、著作権またはライセンス制限が管理されません。アップロードする HTML5 グラフ拡張機能の使用については、ユーザが最終責任を負います。そのため、ページにアップロードする前に HTML5 グラフ拡張機能の使用に関するライセンスまたは許可を所有していることを確認してください。

拡張機能のアップロードとインストールページを使用した追加の HTML5 グラフのアップロード

追加の HTML5 グラフ拡張機能をインストールするには、[拡張機能のアップロードとインストール] ページを使用します。[HTML5 グラフ拡張機能] のメインページから [拡張機能のアップロードとインストール] ページを開くには、下図のように [その他の拡張機能を取得] をクリックします。



下図は、[拡張機能のアップロードとインストール] ページを示しています。

The screenshot shows the 'HTML5 Chart Extensions' section of the Db2 Web Query management console. At the top, there's a button labeled 'Upload and Install Extension' with a 'Browse...' button next to it. Below this, a heading says 'Extensions from GitHub, that are not installed'. A specific extension, 'Timeline Chart' by 'com.ibi.timeline', is listed. It includes a small thumbnail image of the chart, its name, description, version, API version, author, copyright, URL, and license information. There's also a blue 'Install' button with a download icon.

Name:	Timeline Chart
Description:	Timeline Chart helps to display a list of events in chronological order.
Version:	1.0
API Version:	1.0
Author:	Information Builders
Copyright:	Information Builders Inc.
URL:	https://github.com/ibi/wf-extensions-chart/tree/master/com.ibi.timeline
License:	(none)

[拡張機能のアップロードとインストール] ページでは、次の 2 つの方法で追加の HTML5 グラフ拡張機能をインストールすることができます。

- [拡張機能のインストール] ボタン をクリック - [拡張機能のインストール] ボタンは、Information Builders の GitHub サイトの拡張機能セクション (<https://github.com/ibi/wf-extensions-chart>) に公開されているが、ユーザの Web Query に現在インストールされていないグラフ拡張機能のエントリに表示されます。
- [ファイルを選択] ボタン をクリック - [ファイルを選択] ボタンを使用して、ローカル環境で作成された HTML5 グラフ拡張機能パッケージが .zip ファイルフォーマットで保存されているユーザのローカルファイルシステム上のフォルダを参照できます。

[拡張機能のアップロードとインストール] ページから [HTML5 グラフ拡張機能] のメインページに戻るには、[HTML5 グラフ拡張機能] をクリックするか、ブラウザの [戻る] ボタンをクリックします。

手順

HTML5 グラフ拡張機能をローカルファイルシステムからアップロードするには

次の手順で、HTML5 グラフ拡張機能を含む ZIP ファイルをユーザのローカルシステムからアップロードすることができます。

アップロードする前に、HTML5 グラフ拡張機能の使用に関するライセンスまたは許可を所有していることを確認してください。

1. 管理者としてログインし、管理コンソールを起動します。
2. [構成] タブの [HTML5 グラフ拡張機能] をクリックします。
3. [HTML5 グラフ拡張機能] ページで、[その他の拡張機能を取得] をクリックします。

4. [拡張機能のアップロードとインストール] ページで、[参照] をクリックします。
[開く] ダイアログボックスが表示され、ローカル Web Query インストールの拡張機能フォルダが選択されます。
5. アップロードする HTML5 グラフ拡張機能が格納された ZIP ファイルを選択し、[開く] をクリックします。
6. [HTML5 グラフ拡張機能] ページがリフレッシュされ、ページ最上部に戻されます。ここで、新しい HTML5 グラフ拡張機能のエントリが表示されるまで画面を下方向へスクロールします。

手順

HTML5 グラフ拡張機能を IBI GitHub ページからインストールするには

次の手順で、HTML5 グラフ拡張機能を IBI GitHub サイトの拡張機能セクション (<https://github.com/ibi/wf-extensions-chart>) からアップロードすることができます。

1. 管理者としてログインし、管理コンソールを起動します。
2. [構成] タブの [HTML5 グラフ拡張機能] をクリックします。
3. [HTML5 グラフ拡張機能] ページで、[その他の拡張機能を取得] をクリックします。
4. 下図のように、[拡張機能のアップロードとインストール] ページで、[GitHub で利用可能な未インストールの拡張機能] 以下のリストを確認します。

The screenshot shows the 'HTML5 Chart Extensions' page on the IBI GitHub repository. At the top, there's a header 'HTML5 Chart Extensions' and a section 'Upload and Install Extension' with a 'Browse...' button. Below this, a heading 'Extensions from GitHub, that are not installed' is followed by a list of available extensions. One extension is shown in detail:

com.ibi.timeline	Name: Timeline Chart	Install
	Description: Timeline Chart helps to display a list of events in chronological order.	
	Version: 1.0	
	API Version: 1.0	
	Author: Information Builders	
	Copyright: Information Builders Inc.	
	URL: https://github.com/ibi/wf-extensions-chart/tree/master/com.ibi.timeline	
	License:	

5. インストールしたいグラフ拡張機能がリストに表示されている場合は、[拡張機能のインストール] [] をクリックします。
6. [HTML5 グラフ拡張機能] ページがリフレッシュされ、ページ最上部に戻されます。ここで、画面を下方向へスクロールしてこのグラフ拡張機能がインストールされていることを確認します。

手順

インストール済みの HTML5 グラフ拡張機能を有効にするには

HTML5 グラフ拡張機能のエントリで [有効にする] チェックボックスを選択すると、このグラフ拡張機能が InfoAssist+ および Web Query のローカルインストールで使用可能になります。有効にする前に、HTML5 グラフ拡張機能の使用に関するライセンスまたは許可を所有していることを確認してください。

1. 管理者としてログインし、管理コンソールを起動します。
2. [構成] タブの [HTML5 グラフ拡張機能] をクリックします。
3. [HTML5 グラフ拡張機能] ページで、有効化する HTML5 グラフ拡張機能のエントリまで画面をスクロールします。
- 注意：**ブラウザでサポートされる [検索] または [このページの検索] コマンドを使用して、グラフ拡張機能の名前で検索することもできます。
4. 下図のように、[有効にする] のチェックをオンにします。



5. [HTML5 グラフ拡張機能] ページがリフレッシュされ、ページ最上部に戻されます。ここで、画面を下方向へスクロールしてこのエントリのチェックボックスが選択されていることを確認します。

この HTML5 グラフ拡張機能のアイコンが、InfoAssist+ の [グラフの選択] メニューに表示されます。このメニューは、[フォーマット] タブの [グラフ] グループの [その他] コマンドをクリックすると表示されます。

手順

HTML5 グラフ拡張機能を無効にするには

HTML5 グラフ拡張機能のエントリで [有効化済み] のチェックをオフにすると、このグラフ拡張機能が InfoAssist+ および Web Query のローカルインストールで使用できなくなります。

ただし、このグラフ拡張機能は [HTML5 グラフ拡張機能] ページにインストールされた状態で保持され、必要に応じて再度有効にすることができます。

1. 管理者としてログインし、管理コンソールを起動します。
2. [構成] タブの [HTML5 グラフ拡張機能] をクリックします。
3. [HTML5 グラフ拡張機能] ページで、無効にする HTML5 グラフ拡張機能のエントリまで画面をスクロールします。

注意：ブラウザでサポートされる [検索] または [このページの検索] コマンドを使用して、グラフ拡張機能の名前で検索することもできます。

4. 下図のように、[有効化済み] のチェックをオフにします。



5. [HTML5 グラフ拡張機能] ページがリフレッシュされ、ページ最上部に戻されます。ここで、画面を下方向へスクロールしてこのエントリのチェックボックスの選択が解除されていることを確認します。

この HTML5 グラフ拡張機能のアイコンは、InfoAssist+ のリボンから開く [グラフの選択] メニューには表示されなくなります。

手順

HTML5 グラフ拡張機能をアンインストールするには

1. 管理者としてログインし、管理コンソールを起動します。
2. [構成] タブの [HTML5 グラフ拡張機能] をクリックします。
3. [HTML5 グラフ拡張機能] ページで、アンインストールする HTML5 グラフ拡張機能のエントリまで画面をスクロールします。

注意：ブラウザでサポートされる [検索] または [このページの検索] コマンドを使用して、グラフ拡張機能の名前で検索することもできます。

4. 下図のように、[削除 (グラフ名)] をクリックします。



5. 「この拡張機能を完全に削除してよろしいですか」というメッセージで [OK] をクリックします。
6. [HTML5 グラフ拡張機能] ページがリフレッシュされ、ページ最上部に戻されます。ここで、画面を下方向へスクロールしてこのエントリが削除されていることを確認します。

この HTML5 グラフ拡張機能のエントリの表示がページからなくなります。HTML5 グラフ拡張機能が GitHub サイトからインストールされていた場合、[拡張機能のアップロードとインストール] ページに表示され、このページから再インストールすることができます。ローカルファイルシステムからインストールされていた場合はこのページに表示されません。このグラフ拡張機能をローカルファイルシステムから再ロードするためには、[拡張機能のアップロードとインストール] ページの [ファイルを選択] ボタンを使用する必要があります。

2

Db2 Web Query 変更管理

変更管理とは、同一リリースレベルの Web Query 環境間でアプリケーションコンポーネントを移動するプロセスのことです。通常、変更管理プロセスは、アプリケーションをテスト環境で十分にテストした上で、実稼動環境に展開する場合に使用されます。

これらの作業は重要であり、Db2 Web Query では、このような作業を容易にする機能および手法が用意されています。

トピックス

- [変更管理プロセスの理解](#)
 - [変更管理パッケージの作成](#)
-

変更管理プロセスの理解

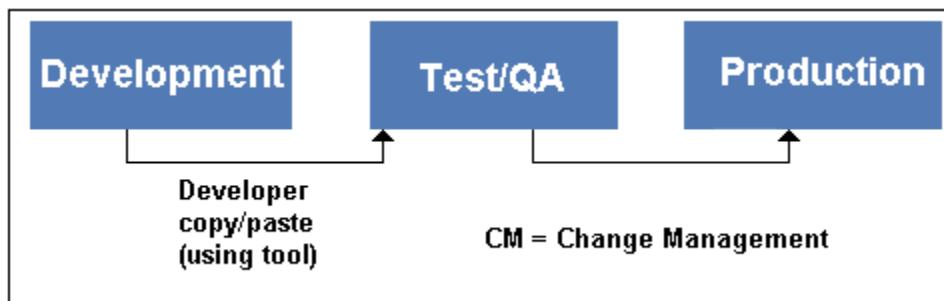
アプリケーションの開発は反復的なプロセスです。開発者は、アプリケーションコードを修正し、コンポーネントを定期的にテスト環境に移動して、ユーザのフィードバックや承認を受け取ります。アプリケーション開発サイクルのある時点でのアプリケーションが安定すると、それを実稼動環境に移動します。アプリケーションを一般公開した後は、問題の解決、テストの実行、実稼動環境への組み込みが必要になります。これが、工程管理とも呼ばれる、変更管理プロセスの重要な点です。

変更管理に対する組織の取り組み方はさまざまです。多くの業務を開発者に委ねる組織もあれば、より高度な管理レベルを維持するための代替プロセスを構築している組織もあります。通常、開発者は開発ツールを使用してこれらの業務を遂行しますが、変更管理の担当者は環境間でアプリケーションコンポーネントを移動するバッチ指向の方法を好みます。アプリケーションを実稼動環境に移動した後の変更作業のため、開発者には、変更管理パッケージを作成するという作業が必要になる場合があります。大規模な企業では、多くの場合、これらの方針を組み合わせて使用します。

次の例では、2つの異なる変更管理プロセスについて紹介します。ここでは、各組織の変更管理プロセスの目的を達成するための機能や手法について説明します。

アプリケーションファイルの移動 - 単純な変更管理プロセス

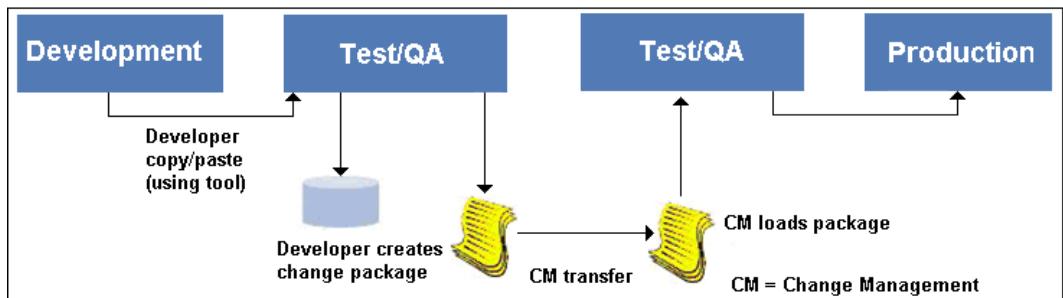
下図のように、開発者は開発ツールを使用して、開発環境とテスト環境の間でアプリケーションファイルを移動します。アプリケーションが完成した段階で、オペレーティングシステムのユーティリティを使用して、アプリケーションをテスト環境から実稼動環境にコピーします。この例では、テスト環境は 1 つだけです。



アプリケーションファイルの移動 - 包括的な変更管理プロセス

この例では、4 つの環境が構築され、アプリケーションコードを実稼動環境に移動する管理レベルが強化されています。開発者は、リソースツリーを使用して、アプリケーションファイルを開発環境からテスト環境へ移動します。その後、ユーザテスト環境に変更を移動する準備ができた段階で、開発者は変更管理エクスポート機能を使用します。

開発者は、変更管理エクスポート機能を使用して、移動するリソースを選択し、変更管理パッケージを作成できます。続いて、管理者は、変更管理インポート機能を使用して、変更管理パッケージをユーザテスト環境に移動できます。各組織のビジネスプロセスとの統合を図るために、コンテンツを自動的にインポートするプロセスを採用している組織もあります。下図のように、アプリケーションのリリース準備ができた段階で、工程管理担当者は、アプリケーションのファイルシステムコピーを実稼動環境に移動します。ユーザがアプリケーションの使用を開始すると、変更管理プロセスは、アプリケーションの保守サポートの段階に移ります。これ以降、管理者は変更管理インポート機能を使用することで、実稼動環境への段階的な更新を簡単に行うことができます。



変更管理パッケージの作成

多くの組織では、ユーザテスト環境および実稼動環境への書き込みアクセス権限を開発者に与えていません。これらの環境へのアクセスは厳しく管理され、アクセス権限は、管理者、工程管理担当者、または変更の管理の自動プロセスのみに許可されています。

ただし、変更をテスト環境に移動する準備ができているかどうかを判断できるのは開発者だけです。開発者は、変更管理エクスポート機能を使用することで、グラフィカルな外観で表示された管理対象のリソースから、変更管理パッケージを作成することができます。作成されたパッケージは、工程管理担当者または自動プロセスによって別の環境へロードされます。

手順

変更管理エクスポートパッケージを作成するには

変更管理エクスポートパッケージを作成するには、Web Query 開発者または管理者の権限が必要です。

変更管理パッケージの作成に必要な手順は次のとおりです。

- シナリオの作成** 変更管理エクスポートユーザインターフェースを使用して、エクスポートするリソースを選択するという方法でシナリオを作成します。シナリオとは、変更管理エクスポートパッケージにエクスポートするすべてのリソースの記述のことです。

変更管理パッケージの作成

- シナリオのエクスポート シナリオの作成後、変更管理パッケージとしてそのシナリオを変更管理エクスポートディレクトリにエクスポートします。エクスポートプロセスでは、フォルダおよび変更管理 ZIP ファイルの 2 つのフォーマットでパッケージが生成されます。フォルダには、変更管理パッケージの展開済みコンテンツが格納されます。変更管理 ZIP ファイルには、このパッケージの圧縮されたコンテンツが、ターゲット環境にダウンロードおよび転送可能なフォーマットで格納されます。この変更管理エクスポートパッケージは、シナリオ名と同一のディレクトリに配置されます。

`/qibm/userdata/qwebqry/base80/cm/export`

エクスポート後のフォルダは、ターゲット環境にコピーされ、次のディレクトリに配置されます。

`/qibm/userdata/qwebqry/base80/cm/import`

注意：変更管理のエクスポートおよびインポートアクティビティは、次のログファイルに書き込まれます。

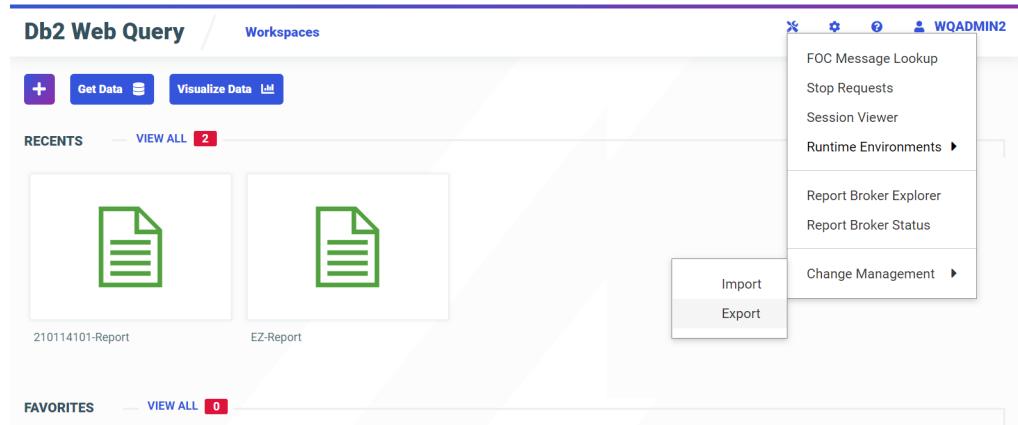
`/qibm/userdata/qwebqry/base80/logs/impexp.log`

- シナリオのダウンロード 変更管理 ZIP ファイルは、Web ブラウザを使用して、エクスポートディレクトリから変更管理ディレクトリ外部の場所にダウンロードすることができます。この外部の場所から、変更管理 ZIP ファイルをターゲットの Db2 Web Query 環境のインポートディレクトリに転送し、そのコンテンツをインポートしたり、コンテンツにアクセスしたりできます。

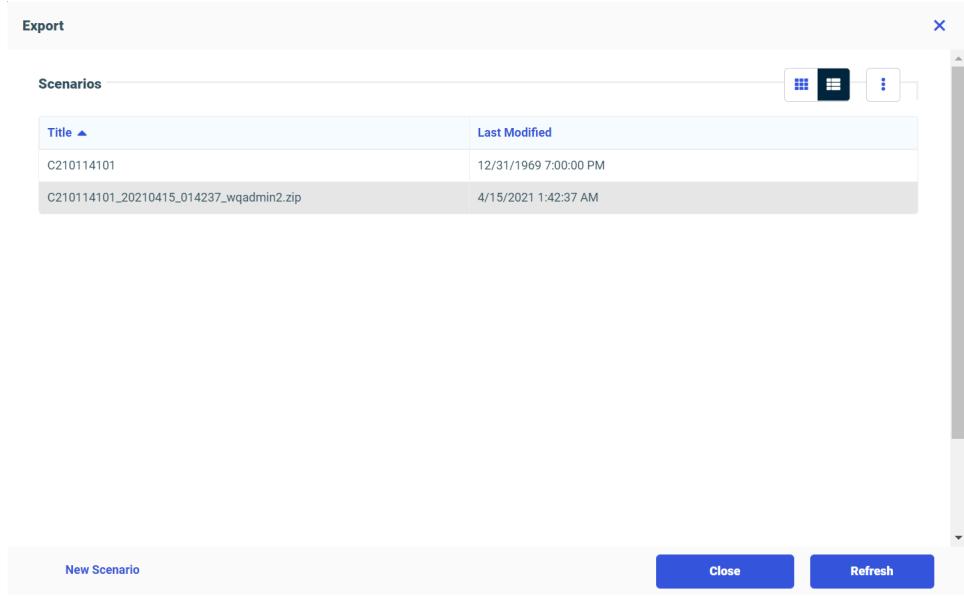
手順

変更管理エクスポート機能にアクセスしてシナリオを作成するには

- 下図のように、Db2 Web Query ホームページのバナーから [ユーティリティ] メニューを開き、[変更管理]、[エクスポート] を順に選択します。



下図のように、[シナリオ] ダイアログボックスが表示されます。



2. 下図のように、[新規シナリオ] を選択して [新規シナリオ] ダイアログボックスを開きます。



3. [新規シナリオ] ダイアログボックスにシナリオの名前を入力し、[作成] を選択すると、下図のように、変更管理エクスポートインターフェースが開きます。



シナリオを作成するユーザインターフェースが表示されます。ここで、ターゲットシステムに移動するリソースを選択します。

変更管理エクスポートインターフェースには、次の 2 つの主要オプションがあります。

ルールを含める このオプションは、デフォルト設定では選択されていません。このオプションは、選択しないでください。

ハンドルの保持 ソース環境を Db2 Web Query バージョン 1.1 から 2.1 または 2.2 にマイグレートし、変更管理プロセスでこのコンテンツを使用する場合は、このオプションを選択する必要があります。バージョン 1.1 からバージョン 2.1 または 2.2 へのマイグレート時に、バージョン 1.1 の HREF がバージョン 2.1 または 2.2 のハンドルとして使用され、-INCLUDE およびドリルダウンの古いコードがバージョン 1.1 スタイル構文として引き続き機能するようになります。これらのハンドルをターゲット環境に移動した場合でも、-INCLUDE およびドリルダウンの古いスタイル構文を含むコードが引き続き動作します。

移動可能なリソースには次のタイプがあります。

- ❑ /WFC/Repository に格納されている任意のフォルダまたは項目。つまり、ユーザインターフェースに [Db2 Web Query] として表示される、プロシージャ、スタイルシート、イメージ、HTML ファイル、スケジュール、配信リストのすべてが含まれます。
- ❑ ツリー上の Reporting Server ノードの任意のアプリケーションまたは特定のファイル。

リソースの選択

- ❑ リソースを選択するには、左側の [変更管理] ツリーから、コンテンツを右側のウィンドウへドラッグします。別の方針として、移動するコンテンツを右クリックし、コンテキストメニューから [サブツリーを含めて選択] または [フォルダのみ選択] を選択することもできます。
- ❑ [サブツリーを含めて選択] を選択すると、そのフォルダおよびサブフォルダのすべてが選択されます。
- ❑ [フォルダのみ選択] を選択すると、その特定のフォルダが選択されますが、コンテンツは含まれません。通常、このオプションは、フォルダに適用されたルールを移動する場合に使用します。

リソースの選択が完了すると、そのリソースのエントリが右側ウィンドウに表示されると同時に、リソースツリーのエントリ上に取り消し線が表示されます。

- ❑ プライベートリソースを選択した場合、[プライベートコンテンツを含める] のチェックが自動的にオンになり、これを手動でオフにすることはできません。
- ❑ プライベートコンテンツを選択した場合、そのプライベートコンテンツのオーナーがターゲット環境に存在する場合にのみインポートされます。

- 公開済みリソースを選択した場合、そのリソースの [プライベートコンテンツを含める] のチェックをオンにすることで、そのフォルダ内にプライベートコンテンツを含めることができます。これにより、ユーザがそのプライベートコンテンツの表示権限を所有していない場合でも、そのフォルダおよびサブフォルダ (ユーザに割り当てられている [マイコンテンツ] フォルダも含む) のプライベートコンテンツがすべてエクスポートされます。
- 親フォルダを含めずにサブフォルダのみを選択した場合、インポートプロセスでターゲット環境に親フォルダが再作成されます。ターゲット環境には、ソース環境と同一のメタデータへの接続が存在する必要があります。
- 外部コンテンツを参照するコラボレーションポータルやページを選択する際は、その外部コンテンツも変更管理パッケージに含める必要があります。
- ソース環境とターゲット環境で適用されるルールが異なる場合、ユーザがソース環境でプライベートコンテンツへのアクセス権限を所有している場合でも、ターゲット環境でアクセスが拒否される場合があります。この問題は、ユーザがソース環境でプライベートコンテンツが格納された公開済みフォルダへのアクセス権限は所有するが、ターゲット環境でそのアクセス権限を所有していない場合に発生します。

フォルダの選択

Title	Full Path	With Private Content	With Subtree
My Workspace	IBFS:/WFC/Repository/My_Worksplace	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
My Content			

4. リソースを選択した後、そのシナリオを保存する必要があります。

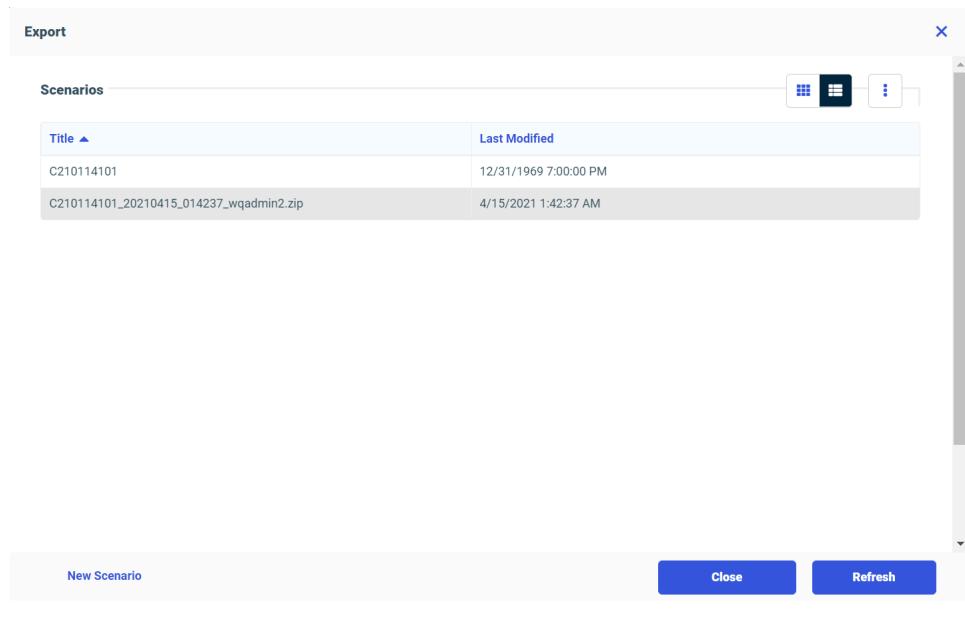
保存を完了後、シナリオを変更管理インポートインターフェースから実行することができます。

手順

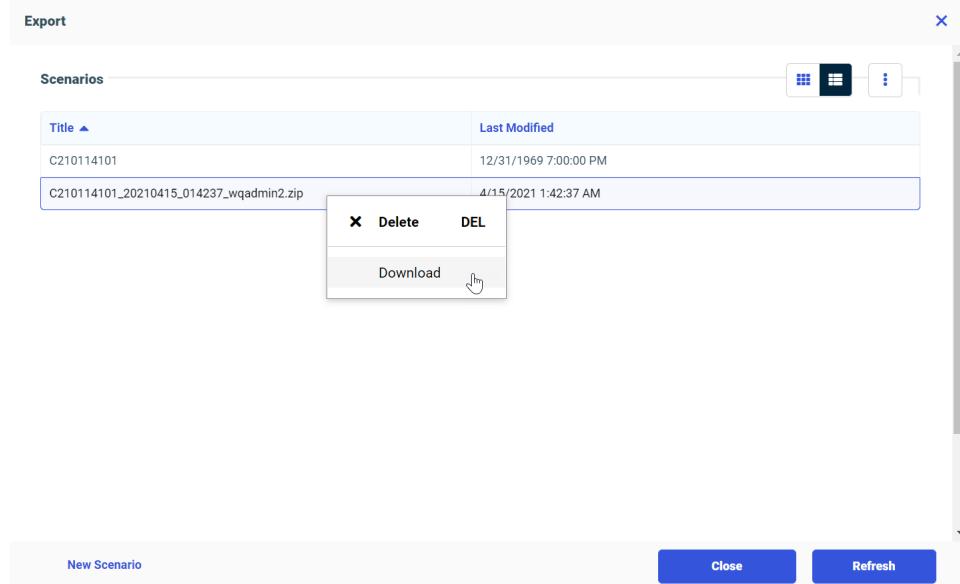
変更管理パッケージ ZIP ファイルをダウンロードするには

エクスポートプロセスでは、変更管理 ZIP ファイルは /qibm/userdata/qwebqry/base80/cm/export に保存されます。ダウンロードプロセスでは、その変更管理 ZIP ファイルが取得され、ユーザのローカルマシンにダウンロードされます。ダウンロードした変更管理パッケージ ZIP ファイルのコピーを別の Web Query 環境に移動して、変更管理パッケージとして使用することができます。

1. 下図のように、Db2 Web Query ホームページのバナーで [ユーティリティ] メニューを開き、[変更管理]、[エクスポート] を順に選択して [シナリオ] ダイアログボックスを開きます。



2. 下図のように、ダウンロードする変更管理 ZIP ファイルを右クリックし、[ダウンロード] を選択します。



注意: 同一名を含む 2 つのリストエントリ間で選択する場合、完全な変更管理パッケージと ZIP ファイルバージョンを区別する際は、ZIP ファイルに割り当てられた名前には取得元の変更管理パッケージの名前、パッケージの作成日時、作成者のユーザ ID が含まれることを覚えておきます。完全な変更管理パッケージに割り当てられた名前には、このような詳細は含まれません。

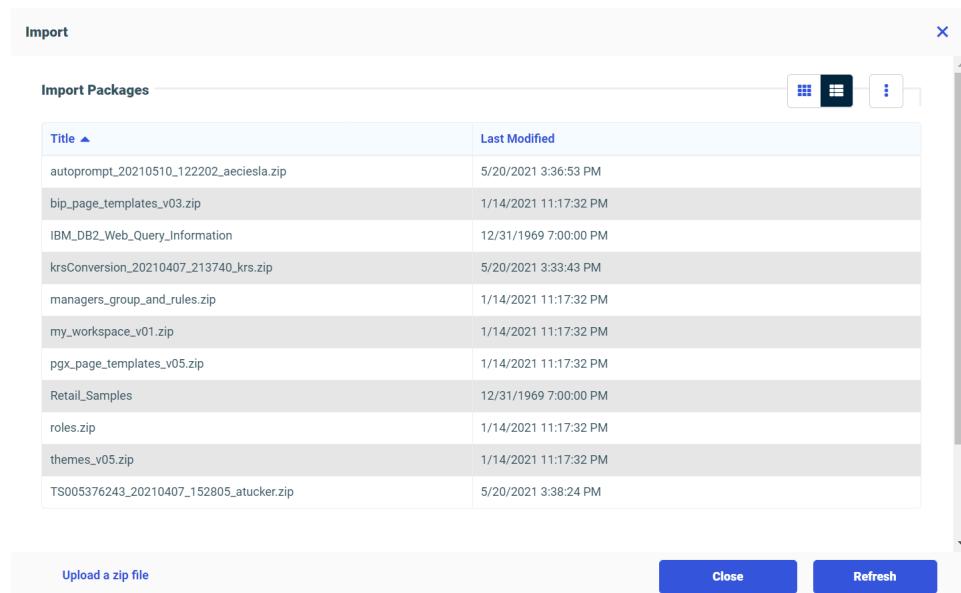
3. ブラウザの指示に従って、変更管理 ZIP ファイルを外部の場所に保存します。
4. [シナリオ] ダイアログボックスを閉じます。

手順

変更管理パッケージ ZIP ファイルをアップロードするには

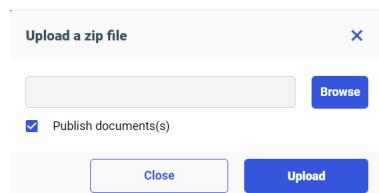
ZIP ファイルのアップロードプロセスでは、ローカルマシンに格納されている変更管理 ZIP ファイルのコピーが、サーバ上の変更管理インポートディレクトリ (/qibm/userdata/qwebqry/base80/cm/export) にコピーされます。さらに、この変更管理 ZIP ファイルのコピーを Web Query にインポートすることができます。

1. 下図のように、Db2 Web Query ホームページのバナーで [ユーティリティ] メニューを開き、[変更管理]、[インポート] を順に選択して [インポートパッケージ] ダイアログボックスを開きます。



2. 変更管理 ZIP ファイルを選択し、[ZIP ファイルのアップロード] をクリックします。

下図のように、[ZIP ファイルのアップロード] ダイアログボックスが開きます。



3. [参照] をクリックし、変更管理パッケージの保存先のパスに移動し、アップロードする変更管理 ZIP ファイルをクリックしてから、[開く] をクリックします。

4. [アップロードするファイル] テキストボックスに変更管理 ZIP ファイルが正しく表示されていることを確認し、パッケージからインポートするファイルを公開するか、非公開にするかを指定します。
 - アップロード完了後に変更管理 ZIP ファイルのコンテンツを公開するには、[ドキュメントを公開] のチェックをオンにします。この設定がデフォルト値です。
 - アップロード完了後に変更管理 ZIP ファイルのコンテンツを公開しない場合は、[ドキュメントを公開] のチェックをオフにします。
5. [アップロード] をクリックします。
確認ダイアログボックスが表示されます。[OK] をクリックしてアップロードを完了します。
6. [ZIP ファイルのアップロード] ダイアログボックスの [閉じる] をクリックします。
新しい ZIP ファイルのエントリが [インポート] ノード下に表示されない場合は、[インポート] ノードを右クリックし、[リフレッシュ] を選択します。

手順

変更管理パッケージをインポートするには

変更管理インポートパッケージを作成するには、Web Query 管理者の権限が必要です。

この手順では、変更管理エクスポートパッケージが事前に作成され、ターゲット環境の次のディレクトリにコピー済みであることを想定します。

変更管理パッケージの作成

/qibm/userdata/qwebqry/base80/cm/import

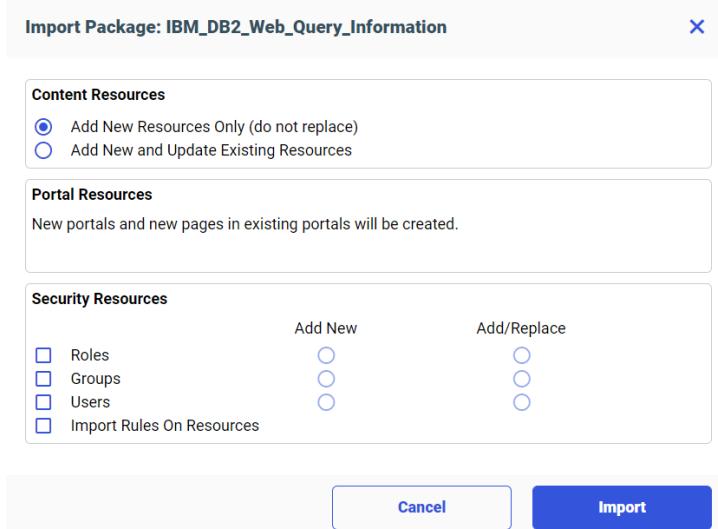
1. 下図のように、Db2 Web Query ホームページのバーで [ユーティリティ] メニューを開き、[変更管理]、[インポート] を順に選択して [インポートパッケージ] ダイアログボックスを開きます。

The screenshot shows the 'Import Packages' dialog box. At the top, there are three icons: a grid, a square, and a three-dot menu. Below the title 'Import Packages', there is a table with two columns: 'Title' and 'Last Modified'. The table lists several zip files:

Title	Last Modified
autoprompt_20210510_122202_aeciesla.zip	5/20/2021 3:36:53 PM
bip_page_templates_v03.zip	1/14/2021 11:17:32 PM
IBM_DB2_Web_Query_Information	12/31/1969 7:00:00 PM
krsConversion_20210407_213740_krs.zip	5/20/2021 3:33:43 PM
managers_group_and_rules.zip	1/14/2021 11:17:32 PM
my_workspace_v01.zip	1/14/2021 11:17:32 PM
pgx_page_templates_v05.zip	1/14/2021 11:17:32 PM
Retail_Samples	12/31/1969 7:00:00 PM
roles.zip	1/14/2021 11:17:32 PM
themes_v05.zip	1/14/2021 11:17:32 PM
TS005376243_20210407_152805_atucker.zip	5/20/2021 3:38:24 PM

At the bottom left is a button labeled 'Upload a zip file'. At the bottom right are two buttons: 'Close' and 'Refresh'.

2. 下図のように、インポートする変更管理 ZIP ファイルを右クリックして [インポート] を選択し、[インポートパッケージ] ダイアログボックスを開きます。



3. [コンテンツリソース] グループで、変更管理インポートを新しいコンテンツリソースのみに制限するには、デフォルト値の [新規リソースの追加のみ (置換しない)] を受容します。

または

変更管理インポートに新しいコンテンツリソースとともに、既存コンテンツリソースの更新を含めるには、[新規リソースを追加して既存のリソースを更新] を選択します。

4. [セキュリティリソース] グループで、次のように選択します。

- [ロール] のチェックをオンにして、変更管理インポートパッケージにロールを含めます。
- [グループ] のチェックをオンにして、変更管理インポートパッケージにグループを含めます。
- [ユーザ] のチェックをオンにして、変更管理インポートパッケージにユーザを含めます。

各セキュリティリソースで、変更管理インポートを新規セキュリティリソースのみに制限するには、デフォルト値の [追加] を受容します。

または

変更管理インポートに新しいセキュリティリソースとともに、既存セキュリティリソースの更新を含めるには、[追加/更新] を選択します。

- d. [リソースのルールをインポート] のチェックをオンにして、変更管理インポートパッケージに追加するセキュリティリソースに割り当て済みのルールを含めます。
5. 構成の完了後、[インポート] をクリックします。

インポートプロセスで変更管理パッケージからコンテンツがロードされ、古い環境で使用されていたフォルダの名前に正確に一致するフォルダに格納されます。変更管理パッケージに含めたリソースが古い環境と同一のフォルダに割り当てられている限り、インポートされたリソースが古い環境と同様に表示されます。

ただし、予期した変更が確認されない場合は、リソースツリーの [ワーカースペース] エントリを右クリックして [リフレッシュ] を選択します。

Legal and Third-Party Notices

SOME TIBCO SOFTWARE EMBEDS OR BUNDLES OTHER TIBCO SOFTWARE. USE OF SUCH EMBEDDED OR BUNDLED TIBCO SOFTWARE IS SOLELY TO ENABLE THE FUNCTIONALITY (OR PROVIDE LIMITED ADD-ON FUNCTIONALITY) OF THE LICENSED TIBCO SOFTWARE. THE EMBEDDED OR BUNDLED SOFTWARE IS NOT LICENSED TO BE USED OR ACCESSED BY ANY OTHER TIBCO SOFTWARE OR FOR ANY OTHER PURPOSE.

USE OF TIBCO SOFTWARE AND THIS DOCUMENT IS SUBJECT TO THE TERMS AND CONDITIONS OF A LICENSE AGREEMENT FOUND IN EITHER A SEPARATELY EXECUTED SOFTWARE LICENSE AGREEMENT, OR, IF THERE IS NO SUCH SEPARATE AGREEMENT, THE CLICKWRAP END USER LICENSE AGREEMENT WHICH IS DISPLAYED DURING DOWNLOAD OR INSTALLATION OF THE SOFTWARE (AND WHICH IS DUPLICATED IN THE LICENSE FILE) OR IF THERE IS NO SUCH SOFTWARE LICENSE AGREEMENT OR CLICKWRAP END USER LICENSE AGREEMENT, THE LICENSE(S) LOCATED IN THE "LICENSE" FILE(S) OF THE SOFTWARE. USE OF THIS DOCUMENT IS SUBJECT TO THOSE TERMS AND CONDITIONS, AND YOUR USE HEREOF SHALL CONSTITUTE ACCEPTANCE OF AND AN AGREEMENT TO BE BOUND BY THE SAME.

This document is subject to U.S. and international copyright laws and treaties. No part of this document may be reproduced in any form without the written authorization of TIBCO Software Inc.

TIBCO, the TIBCO logo, the TIBCO O logo, FOCUS, iWay, Omni-Gen, Omni-HealthData, and WebFOCUS are either registered trademarks or trademarks of TIBCO Software Inc. in the United States and/or other countries.

Java and all Java based trademarks and logos are trademarks or registered trademarks of Oracle Corporation and/or its affiliates.

All other product and company names and marks mentioned in this document are the property of their respective owners and are mentioned for identification purposes only.

This software may be available on multiple operating systems. However, not all operating system platforms for a specific software version are released at the same time. See the readme file for the availability of this software version on a specific operating system platform.

THIS DOCUMENT IS PROVIDED "AS IS" WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EITHER EXPRESS OR IMPLIED, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE, OR NON-INFRINGEMENT.

THIS DOCUMENT COULD INCLUDE TECHNICAL INACCURACIES OR TYPOGRAPHICAL ERRORS. CHANGES ARE PERIODICALLY ADDED TO THE INFORMATION HEREIN; THESE CHANGES WILL BE INCORPORATED IN NEW EDITIONS OF THIS DOCUMENT. TIBCO SOFTWARE INC. MAY MAKE IMPROVEMENTS AND/OR CHANGES IN THE PRODUCT(S) AND/OR THE PROGRAM(S) DESCRIBED IN THIS DOCUMENT AT ANY TIME.

THE CONTENTS OF THIS DOCUMENT MAY BE MODIFIED AND/OR QUALIFIED, DIRECTLY OR INDIRECTLY, BY OTHER DOCUMENTATION WHICH ACCOMPANIES THIS SOFTWARE, INCLUDING BUT NOT LIMITED TO ANY RELEASE NOTES AND "READ ME" FILES.

This and other products of TIBCO Software Inc. may be covered by registered patents. Please refer to TIBCO's Virtual Patent Marking document (<https://www.tibco.com/patents>) for details.

Copyright © 2021. TIBCO Software Inc. All Rights Reserved.